



TITLE:

契丹・女真文字考

AUTHOR(S):

田村, 實造

---

CITATION:

田村, 實造. 契丹・女真文字考. 東洋史研究 1976, 35(3): 361-413

ISSUE DATE:

1976-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153638>

RIGHT:

# 東洋史研究

第三十五卷第三號 昭和五十一年十二月 發行

## 契丹・女眞文字考

田 村 實 造

- 一 契丹文字考
- 二 契丹文字解讀への試み
- 三 女眞文字考
- 四 三度び『大金得勝陀頌碑』女眞文の解讀について

### 一 契丹文字考

——契丹文哀冊の發見と契丹大字・小字——

北アジアには古來トルコ系・モンゴル系・ツングース系の遊牧・狩獵民族がいて、それぞれ統一ある民族國家を建設し、歴史上大きな役割りを演じたことは周知のとおりであるが、かれらはいずれも自らの文字（國字）を創制している。たとえばトルコ族は突厥文字、ウイグル族は回紇（回鶻）文字、契丹族は契丹文字、タングート族は西夏文字、女眞族は女眞文字、モンゴル族はバспа（バクバ）文字、滿洲族は滿洲文字というように。これらの文字は前世紀以來内外の學者の努力によって、いちおう解讀されるまでに進んだが、その結果それら諸文字には、西方の民族のあいだに用いられた表

音文字にならったものと、中國の漢字にならった表意文字との二種があることが知られるようになった。そのなかで、ひとり契丹文字だけは、確實な資料を缺いたため今世紀前半ごろまでは、この文字がはたしていかなる字形のものであるかさえ確認されなかった。

もともと記録の上では、契丹民族が契丹文字を創制し國字として領内に公用したことは、近隣の諸民族に大きな影響をおよぼし、やがて東郷に勃興した金帝國では女眞文字が、また西郷に建國したタングート族の大夏國では西夏文字が、いずれも契丹文字にならって制作されたといわれるから、契丹語および契丹文字に對しては、すでに前世紀以來學者のあいだには深い關心をもたれてはいた。すなわちクラプロート H. J. Klaproth は一九世紀前半にその著『アジア語彙集』(Asia Polyglotta, Paris, 1823) のなかで、中國の史書にみえる契丹語がツングース語とくに滿洲語に類似していることを指摘し、その後シムム W. Schott (Kitai und Karakitai, Beitrag zur Geschichte Ost und Innerasiens, 1879) は契丹語がツングース語系に屬すと推定した。

また契丹文字に關しては、一九世紀なかごろ以後レミューザ Rémusat、ワイリー Wylie、ブッシュnell Bushell、マルカルト Marguart の諸學者によつて、女眞文字とともに論じられるところがあった。なかでも白鳥庫吉博士は一八九八年、當時としては劃期的な見解を盛つた論考「契丹・女眞・西夏文字考」(『史學雜誌』第九編第一號、明治三二年)において王易の『燕北錄』や陶宗儀の『書史會要』にみえる朕・敕・走・馬・急のいをもつ契丹文字や、また河南省開封の『宴臺國書碑』(『女眞進士題名碑』)の文字、陝西省乾縣の北關外に残る唐の高宗陵の無字碑に後刻されている『大金皇弟都統經略郎君行記碑』の文字、あるいは『吾妻鏡』にみえる異國文字などをとりあげ、これらを比較検討して『燕北錄』や『書略郎君行記碑』の文字、あるいは『吾妻鏡』にみえる異國文字などをとりあげ、これらを比較検討して『燕北錄』や『書史會要』のものは契丹文字、『宴臺國書碑』の文字は女眞小字、『大金皇弟都統經略郎君行記碑』の文字は女眞大字と推定した。しかし契丹文字に關するかぎりでは、博士の考えも資料不足のため推定の域を出なかつたといえる。

契丹文字が確認されるまで

契丹文字が學界で確認されるようになったのは一九二二年ケルヴィン師 R. P. L. Kervyn

が慶陵（内蒙古自治區バリン左翼旗）の中陵<sup>⑤</sup>から未知の文字を刻した哀冊——皇帝・皇后の墓誌銘をいう——二面を發見し、この未知の文字を現場で中國人に筆寫させて、そのうちの一面を翌年『北京カソリック公報』（Le Bulletin Catholique de Pékin 第一〇年第一一八號）に契丹文字として紹介——同年 P. Pelliot も、この全文を『通報』T'oung Pao 誌上に掲載——したことはじまる。これにもとづいて一九二五年羽田亨博士は、この新出の哀冊文と、またかつて白鳥庫吉博士や桑原隲藏博士らが女眞大字と推定されていた『大金皇弟都統經略郎君行記碑』の未知文字を契丹小字、また『燕北錄』や『書史會要』にみえる契丹文字と現在ソウル博物館收藏の八角鏡面の未知文字とを契丹大字であろうと推定して、契丹文字に關する從來の諸説を正すところがあった。（羽田亨「契丹文字に關する新資料」『史林』第一〇卷第一號）。ただし『郎君行記碑』も八角鏡面の文字も、實は契丹大字と小字とをまじえたものであることは後述するとおりである。

さてケルヴィンによる契丹文哀冊の紹介は、世界における東洋學者たちの注目をひいたが、ただし發表されたものが網目版の不鮮明な寫眞であつたこと。かつそれが素人の中國人の手で現地の墓室内で筆寫されたものであつたため、資料としての信頼性に缺けるところがあつた。なお、この筆寫の契丹文哀冊二面は、のちに一九三三年 Jos. Mullie が T'oung Pao Vol. XXX. に發表した「遼の慶陵」Le Sépultures de King des Leao の中に(A)・(B)として再録<sup>⑥</sup>、さらに金毓紱編『遼陵石刻集錄』には、これを複寫して(A)を興宗皇帝契丹文哀冊（1圖參照）(B)を仁懿皇后契丹文哀冊として收録しているが、この方がより鮮明である。

### 契丹文哀冊の發見

ケルヴィンの調査後數年を経た一九三〇年の夏、熱河省主席湯玉麟の息湯佐榮の命によつて慶陵の大規模な發掘が行われた。この發掘において慶陵三陵墓のうち東陵と西陵とから聖宗皇帝・仁德皇后・欽哀皇后・道宗皇帝・宣懿皇后の漢字哀冊の碑身・篆蓋五組一〇面および契丹文の哀冊碑身・篆蓋二組四面の合計一四面の哀冊碑石、ならびに陵墓内にあつた多數の副葬品や明器などが、牛車とらくだの背を利用して承徳に運び去られたと傳えられる。ただし、このとき中陵のみは地下水を深くたたえていたために、開掘は成功しなかつた。これはおそらく一九二二年六月におけるケ



1 圖 興宗皇帝契丹文哀冊（大字と合成小字とのまじり文、手寫）

ルヴィンや當時の林西知縣の王士仁らによる中陵の發掘によって内部から地下水の湧出がはげしくなったためであろう。ところが承徳に運び去られたという一面——林西で仁懿皇后（興宗の妃）の哀冊篆蓋一面を加えて計一五面——の哀冊碑石の消息は、その後杳として知られなくなった。のちに著者が探査したところでは、一旦承徳の湯邸に搬入された碑石は、やがて承徳から陸路、上板城（承徳の東方約四マイル）に運ばれ、灤河を利用して灤縣に下り、同驛から鐵路、奉天（瀋陽）の湯佐榮邸に搬入されたが、その梱包もとき終らないうちに滿洲事變が勃發し、湯邸もろとも日本軍に押收されてしまった。<sup>⑧</sup>

たまたま當時北京——そのころは北平とよばれていた——に留學中であつた著者は、一中國人から承徳に運ばれた慶陵の哀冊碑が奉天方面に移送されたいことを聞知したので、一九三二年三月北平より歸國する途中奉天に立寄り、八方探査に努めたところ、めざす哀冊石碑が日本關東軍管理下の湯佐榮邸内に保管されていることを知り、日本軍官憲との幾度かの折衝の末、ついにシュロなわで頑丈に包まれたまま庭前に放置されていた四面の契丹文哀冊と聖宗皇帝以下の遼朝帝・後の漢字哀冊一一面との計一五面を見つげ出すことができた。このときの感動の餘韻は、いまでも胸



の三六字（六行六字詰）は二個ないし六個組み合せて、ほぼAの第一行目の一〇語分をなし（2圖・3圖）、後者の四行四字詰の一六字は、二個ないし三個ずつ合成してBの第一行目の七語（4圖・5圖）を形作っていることが知られるので、前者は碑身Aの篆蓋であり、後者は碑身Bの篆蓋であることが確認される。さらにこの二組の哀冊を道宗と宣懿皇后の漢文哀冊と比較すると、字数の多いAが道宗皇帝の哀冊であり、少ない方のBが宣懿皇后のものであるとの推定が成り立つ。

なお道宗と宣懿皇后の兩哀冊碑のほかに、碑石そのものは現在不明であるが、さきに紹介したように、ケルヴィンが中陵の墓室内で發見して中國人に

鈔寫させた二葉の契丹文哀冊がある。羅福成、王靜如兩氏の研究によれば、この二葉は興宗皇帝と仁懿皇后との契丹文哀冊であるという。このうち前者は三七行八四五字をかぞえ、その第一行目から本文がはじまり、撰者の官職・氏名と思われるものは最終行に書かれている（1圖參照）。後者は三二行五八二字、その第一・二行目はともに三字ずつ大書され、羅福成はこの六字を「仁懿皇后哀辭」と判讀している。この哀冊も撰者の官職氏名を最終行に書すが、前掲の道宗と宣懿皇后との哀冊の様式からみて、興宗契丹文哀冊に比定される前者の冒頭には、契丹文による興宗の徽號が、ついで第二・三行には哀冊撰者の官職・氏名があり、また後者の仁懿皇后哀冊も、冒頭の二行は「仁懿皇后哀辭」（?）の契丹字がおそらく一行に、そして第二・三行目には筆寫では最終行におかれている撰者の官職・氏名が書かれていたのではないかと推定される。

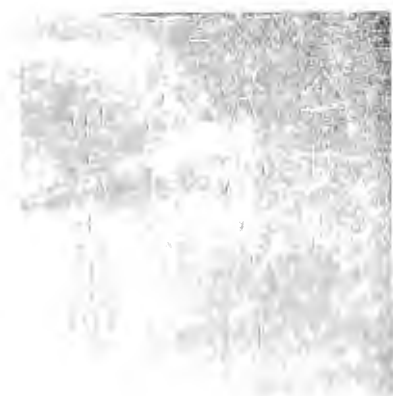
今<sup>1</sup> 次<sup>2</sup> 叱<sup>3</sup> 夫<sup>4</sup> 公<sup>5</sup> 元<sup>6</sup> 有<sup>7</sup> 友<sup>8</sup> 本<sup>9</sup> 余<sup>10</sup> 志<sup>11</sup> 女<sup>12</sup>

以上の六種——道宗と宣懿皇后哀冊は蓋・

身一組ずつ。興宗と仁懿皇后哀冊は鈔寫の本

文のみ——が慶陵の契丹文哀冊として現在知

5圖 宣懿皇后哀冊篆蓋の契丹小字（楷書體）



4圖 宣懿皇后哀冊の篆蓋  
（契丹小字，篆書體）

られている全であり、重複するものをふくめて約三千字餘りをかぞえる。このほかにも慶陵關係の契丹文字としては、東陵墓室内の各人物肖像畫の肩上に署名された計二十數個の墨書文字（『慶陵』1 Fig. 67）がある。

そのほか慶陵關係以外の契丹字資料として戦前に知られていたものは、

大金皇弟都統經略郎君行記碑

契丹字銘圓鏡（韓國國立ソウル博物館藏）

契丹字銘八面鏡（同右）

契丹字玉盞（『遼陵石刻集錄』下冊、第五所收）

契丹字魚符（羅振玉『歷代符牌錄』および『遼陵石刻集錄』下冊、第五所收）

符牌に刻出された契丹文字（『燕北錄』所收のもの、『成吉思汗聖旨牌』京都大學文學部藏。羅振玉『歷代符牌錄』所收）  
林東市附近四方城古墓から出土した黄釉皿の裏面に墨書された契丹文字

などがあった。

さらに戦後新出土の資料としては、

義縣出土契丹文墓誌銘考釋（厲鼎煒『考古學報』第八冊 一九五四）

遼寧錦西・西孤山出土遼墓墓誌（『考古通訊』一九五六年二期）

金、天德二年、契丹文墓誌銘（蓋・身一對）蓋、三行九字。身、五〇行約二八〇〇字（鄭紹宗「興隆縣（河北省）

梓木林子發現的契丹文墓誌銘」『考古』一九七三年五號）

（王靜如「興隆出土金代契丹文墓誌銘解」『考古』同右）

吉林大安出土契丹文銅鏡（陳述『文物』一九七三年八號）

承德發現的契丹符牌（鄭紹宗『文物』一九七四年一〇月期）



などがその主要なものである。

そこで慶陵出土の契丹文哀册や戦後新に発見された契丹文墓誌銘などを通じて、これまでに確認しえた契丹文字についての知見をまとめてみると、つぎのようである。

1 契丹文字は、その字形からみると漢字に似ていること。

2 契丹文字には、その構造を異にする二種類の文字がみとめられること。

3 その第一類は、漢字に似た表意文字いわゆる義字で、字劃は單純なものが多く、一字で一語をあらわすもの、たとえば、力、小、十、口、山、丰(年)などで、羅福頤「契丹國書管窺」(『燕京學報』第三七期 一九四九)によると、

このような表意文字が契丹哀册のなから九四個檢出されるという。しかし、われわれの計算では道宗、宣懿皇后、郎君行記碑および筆寫の興宗、仁懿皇后の哀册を通じて一三〇〜一四六個を抽出することができた。

4 第二類は漢字の「部首」に似た字形のものを、あたかも漢字の偏旁(へんぽう)のように組み合わせる一個の合成文字を作るが、その一字一字はそれぞれ音價をもつ表音文字、いわゆる音字で、したがって、これらを若干個づつ組み合わせる合成した一字は一語をあらわすと考えられる。

それでは、つぎにこの二種類の契丹文字の成り立ちについて、『遼史』その他の史料を檢討することにしよう。

**契丹文字の創制と大字・小字** 契丹文字について『遼史』の傳えるところでは、大字と小字との二種類があり、大字は建國後もない神冊五年(九二〇)に太祖阿保機によって作られたと、つぎのようについて。

神冊五年春正月乙丑、始製契丹大字、……九月壬寅、大字成、詔頒行之(太祖紀)

しかし契丹大字が阿保機一人によって創作されたとは信じがたく、たとえば『遼史』卷七六、耶律魯不古傳には、

初太祖制契丹國字、魯不古以贊成功、授林牙、監修國史

とみえるし、また耶律突呂不も贊成者の一人であったといえば、これらの人びとが大字制作に參與したことがわかる。い

や、これらの契丹人ばかりではなく、後述する『五代會要』や『新五代史』にいうように、大字は漢人の指導下に作られたのであろうことも充分に考えられる。ちなみに、大字の大半は字形の大きさでなく「はじめ」の意であろう。

つぎに契丹小字は、太祖の弟迭剌<sup>テラ</sup>が命をうけ、ウイグル人についてウイグルの言語・文字を學習し、それを参考にして作成したという。『遼史』卷六四「皇子表」には、

迭剌性敏給、……回鶻使至、無能通其語者、太祖曰、迭剌聰敏可使、遣送之、相從二旬、能習其言語・書、因制契丹小字數少而該貫

とみえるが、小字もおそらく迭剌一人の手に成ったものではあるまい。白鳥庫吉博士はこの契丹小字制作の年次を「契丹・女眞・西夏文字考」において、天贊三年（九二四）ないし四年のころと推定している。こうして前引の『遼史』の記載にもとづいて、一般には遼國の初め、神冊五年ごろまず契丹大字が造られ、ついで契丹小字が迭剌によってウイグル文字を参考にして作られ、これら二類の文字が國字として遼代を通じて使用されたのであろうと考えられてきた。

他方中國（宋朝）がわでも、契丹文字の創制について、つぎのように傳えている。たとえば王溥の『五代會要』卷二九には

契丹本無文記、唯刻木爲信、漢人陷番者、以隸書之半、就加增減、撰爲胡書、同光（五代後唐の年號、九三—二六、遼の太祖天贊時代）之後、稍稍有之

といい、あるいは歐陽修の『新五代史』卷七二にも、

至阿保機（太祖）、稍併服諸小國、而多用漢人、漢人教之、以隸書之半、増損之、作文字數千、以代刻木之約などという。

これらの漢文史料によれば、太祖は亡命漢人の指導によって隸書體——哀冊の契丹字は楷書體であるが——の漢字の字劃を増損して契丹文字を神冊五年（九二〇）に作り、同光すなわち天贊ごろには、それがかなりの數（數千字？）にも達した

ようである。この契丹文字が天贊時代に漢人の指導によって作られた文字だとすれば、おそらく大字をさすのであろう。では『遼史』にいう契丹大字と小字とは、さきに確認した契丹文字の第一類（表意文字）と第二類（表音文字）とのいずれに、それぞれ對比させることができるであろうか。それについて、まず手がかりになるのは小字であるが、これはさきにもいったように、ウイグル言語・文字にヒントをえて制作され、その特徴としては「數少なくして該貫す」といわれるから、その數は大字にくらべては少ないが、しかし契丹語を寫すのには「充分こと足りた」（該貫）ことがわかる。してみると小字——小は大に對して次ぎの意——は音價をもつ表音文字で、ここにいる第二類の文字であろうと推定される。すなわち小字は、その字形が漢字の部首に似ており、これを若干個組み合わせさせて合成文字を作ることができる。

さきの道宗皇帝と宣懿皇后の契丹文哀册の篆蓋をみると、これらの合成文字はそれぞれ若干の小字に分解されており、たとえば道宗皇帝と宣懿皇后との二基の篆蓋にみえる文字をとって、5く6ページの説明をくりかえすと、ここでは各文字が篆書體風に、前者は毎行六字づつ六行に、後者は毎行四字づつ四行に刻出されている。これらの文字をそれぞれの哀册碑身の合成文字と照合して、その一語一語にあてはめてみると、つぎのように前者は一五語を三六個の文字に分解し、後者は七語を一六個の文字に分解していることがわかる（3圖・5圖参照）。この文字はそれぞれに音價をもっているであろうから、これらを組合わせた合成文字は契丹語の一語を寫したものと考えられる。

契丹小字とは、このような合成文字を構成する一つ一つの素文字をさすものと考えるが、契丹大字との關連からやがてこの素文字である本來の小字のはかに、これを組合わせて合成した文字をも、ともに契丹小字とよぶようになったのであろう。ちなみに、われわれは、これまでこの素文字（小字）を原（元）字とか字母などと稱し、合成文字を小字とよんでいたが、前引の『遼史』「皇子表」の記載を素直によめば、原字（字母）こそ小字とよぶべきである。そこで本論文では、まぎらわしさをさけて合成文字を便宜上「合成文字」または「契丹文字」とよぶことにしたい。

なお小字についていえば、その字形は漢字に似て、その合成法も漢字の扁・旁のしくみによってはいるものの、それぞ

れ音價をもつ文字を若干個合成して一語を寫している點は、まさしく脱漢文化に努めた契丹民族の心意氣を、ひいては遼國文化の特性をよく象徴するものといえよう。さきに引用した『新五代史』や『五代會要』に、契丹文字は「隸書之半を増減して作ったものである」というのは、要するにその字形をさしていったものであらう。

こうして契丹の大字および小字がいま説明したようだとすれば、契丹人が表音の小字を組み合わせて一語を表わす合成文字と、表意文字の大字とを相伴用しつつ契丹語を書き寫す方法は、あたかも表意の漢字と表音のかな文字とをまぜ合わせて、日本語を書き寫す「かなまじり文」と似た點があるように考える。もともと日本文の漢字とかな文字、契丹文の小字を合成した合成文字と大字との併用のしかたをみると、日本文では表意文字の漢字が複雑な形であり、表音のかな文字が音價をもちながら一字づつ分離したかんたんな形であるのに對し、契丹文では反對に、表意の大字が比較的かんたんな字形であり、表音のかな文字に相當する小字を組み合わせた合成文字は、契丹語の一語をあらわすしくみのため、その字形がかえって複雑である點は大きく異なる。

つぎに契丹文字を合成する小字（いわゆる原字あるいは字母）の數をみると、慶陵の契丹文哀冊のみからとり出してみると、その數はざっと三〇〇個内外<sup>⑥</sup>を推算することができる。もともと近刊の鄭紹宗「興隆縣梓木林子發現的契丹文墓誌銘」によれば、かれは哀冊のほかに、戰後新に出土した契丹文墓誌銘からも抽出して、四〇二個の字母（小字）表をかかっているが、この表のなかには一部重複もみられる。なお契丹文字を合成する小字のなかには、大字の字形を整理して採り入れたものも少なくないようである。ちなみに『遼史』が小字について「數少くして該貫す」といっているにもかかわらず、小字が三〇〇個内外もかぞえられるのは、いかにも多すぎると疑問視する人もあるが、表意文字が漢字にみるように無制限に作ることができるのに比べると、三〇〇個内外でも數少ないといつてよからう。

**契丹小字の合成法と大字** こうして契丹小字の合成のしくみを契丹文哀冊の碑面にみえる契丹文字から考えてみると、合成される小字は二個ないし七個（？）を限度とし、その組み合わせかたにも、つぎに圖示するようなA型・B型の



字とが組み合わされるばあいには、その旁<sup>つづ</sup>や語尾の一字ないし若干個の小字は、名詞の格（助詞）、動詞・助動詞の變化を示す接尾語あるいは形容詞などであるばあいが少なくない。これは後述するように（18・19ページ）、契丹語がアルタイ系のモンゴル語と同系で、中國語とはその語系を異にするゆえであらう。したがって契丹語を文章に表現するには、あたかも日本人が名詞の格（助詞）や動詞・助動詞の變化を示すために、かな文字をもって漢字と漢字とをつないで文章を表現するように、契丹小字はもともと大字と大字をつなぐ——あるいは補なう役わりをするためのものと考える方が當をえているかと思う。こうして遼國では、この國字である大字・小字を公用して行政に資したといわれるが、このことは必要上からとともに契丹指導層が漢文化を強く意識しつつ、それに對抗しようとして考案したものであらうといえる。

契丹文字の行用　ところが考えてみると、これまで述べたように表意文字（大字）と表音文字（小字）とを行用するにあたり、表音の小字は複雑な合成のしくみをもっており、このような複雑な文字の読み書きが、はたして當時の遼國一般に普及したかどうか疑わしい。それはせいぜい知識人が書記などのような特定階級の限られた人びとによって使用されたにとどまったのではなからうか。もっとも、たとえば『詞林典故』卷二に「遼國又有北面林牙（翰林の意）、則掌契丹文字、行於國中者、南面林牙則兼掌中國文字」とみえる記載によると、國中に行用されたといえば、かなり廣範圍にわたって使用された——少くとも讀まれた——とも考えられる。とすれば、契丹文字は外見上では複雑煩瑣のようにみえても、小字の組合せ原理は契丹人にとって案外に理解し易かったのかも知れない。であればこそ契丹大字も小字も遼代ばかりでなく、金代になっても女眞文字や漢字とならんで行用されつつ遼・金代の約二百數十年間を通じて生き抜くことができたのであらう。

金代についてみても、金初から中期ごろにかけては、契丹文字は大字・小字とも盛んに使用されたらしく、近年河北省興隆縣梓木林子から出土した蕭仲恭の契丹字墓志銘（五四字詰め五〇行）<sup>⑥</sup>は金の海陵王天德二年（一一五〇）のものであり、また『金史』卷五三「選舉三」によれば、正隆元年（一一五六）には國史院に契丹書寫の官が設けられている。

國史院書寫、正隆元年定制。女直書寫、試以契丹字書、譯成女直字、限三百字以上。契丹書寫、以熟于契丹大・小字、

以漢字書、譯成契丹字、三百字以上。詩一首、或五言七言四韵、以契丹字出題

こうして海陵王をついだ世宗も、國粹主義を鼓吹する上から女眞文字の普及を熱心に推進したにもかかわらず、やはり契丹文字の方が歴史が古くて、詩文のごときもその義理の深微さをあらわすのに、女眞文字がおよばないことを認めざるをえなかったという<sup>⑥</sup>。ところが、つぎの章宗朝になると、ようやく契丹字の使用も下火になり、女眞字から漢字、漢字から女眞字への直譯が行なわれるようになった。國史院においても契丹字書寫は罷められることになった。

明昌二年四月癸巳、諭有司、自今女直字直譯爲漢字、國史院書寫契丹字者罷之（『金史』卷九「章宗紀」）

それでも『金史』の列傳中から檢出してみると、金代を通じて契丹人はもとより女眞人にも契丹大・小字に通曉したものが、いかに多かったかが知られるし、元初にあっても契丹文字はなお一部の人びとの間に使用されていたといわれる。

以上、慶陵の哀冊碑石發見以前における契丹文字と契丹語に關する内外諸學者の研究の紹介、哀冊碑の發見による契丹文字の確認、契丹大字・小字創制の仕末および小字合成のしくみと大字との關係など、これまでこの文字について明らかになしえたところを説明しつつ私見をのべた。つぎにそれらを要約してみると、

(1) 契丹文字には表意の大字と表音の小字との二類がある。人びとはこの大字・小字を並用して契丹語を表現しつつ、遼・金の二朝二百數十年の間公用した。

(2) 契丹大字は現在知られる資料によるかぎり一三〇〇一四六をかぞえ、小字は約三〇〇内外で、これらを若干個——一般に二個ないし七個——を組み合わせて一語を成した。そして一連の契丹文は、大字と小字の合成文字とをまじえて書き寫された。

(3) 小字の組み合せ順は、一般に左から右に並べる二個を限度として上下段にかさねる。同一段の二個はつねに左から右へ列べられ、二個のときは左・右のほか、まれには上下にかさねるばあいもある。二段以上のばあいは、上段の右から下段の左へつづく。

(4) 大字・小字とも字形は漢字の部首に似たものが多い點からみると、契丹文字に於ては漢字の影響は、われわれが豫想する以上に大きいものがあるように考えられる。

(5) 組み合わされた小字の語尾の一字ないし四字は、名詞の格(助詞)や動詞の接尾語および助動詞・形容詞などを示すばあいが多い。これは後述するように、契丹語がアルタイ系の言語であるため、契丹語を寫すには表意の大字だけでは不充分で、表音の小字をもって大字と組み合わせる必要があつたのである。

## 二 契丹文字解讀への試み

**戦前の契丹文字研究の動向** 戦前における契丹文字解讀への努力は、慶陵出土の契丹文哀冊とこれに對應する漢文哀冊とを比較對照することによつて、手がかりを求めようとする點にもつぱら注がれてきた。

前述したように、一九二二・二三年ケルヴィン、ミュリー兩師による興宗皇帝と仁懿皇后との契丹文哀冊の鈔寫が發表され、つづいて一九三二年(昭和七年)三月、道宗と宣懿皇后との二組四面の契丹文哀冊碑石が、著者によつて奉天(瀋陽)で發見され、同年五月にその全拓影が京都大學において公開紹介されるや、これがきっかけになつて關東軍の嚴重な管理下にあつた哀冊碑石の手拓の禁が學術上の理由で緩和され、その拓影は學界に流布することになった。こうして各國の學者、わけても日本および中國の諸學者による契丹文字解讀への研究が、あいついで發表されるにいたつた。<sup>⑥</sup>

なお、著者がのちに見ることをえた下鴻儒(ペンドウ)「熱河林東契丹國書墓誌」(『東北叢鏤』一四期、一九三二)によれば、これよりさき一九三〇年一〇月、當時遼寧圖書館員であつた下鴻儒が國立中央研究院北平歷史語言研究所員の梁思永とともに林東・林西地方に調査旅行をしたとき、かれは林西において慶陵出土の契丹文哀冊の手拓數葉をえて、これを『東北叢鏤』に紹介し、あわせて拓影入手の顛末についても報告している。しかしこの報告文は、不幸にも同年(一九三二)に勃發した、いわゆる「滿洲事變」のためか、當時中國でもあまり知られなかつたようである。



さて註⑧に列舉した契丹文字の解讀に關する諸研究のうち、最初に大きな成果をもたらしたのは羅福成「遼宣懿皇后哀冊釋文」〔遼國書哀冊釋文考證〕（遼陵石刻集錄 所收）および王靜如「遼道宗及宣懿皇后契丹國字哀冊初釋」〔契丹國字再釋〕であろう。慶陵出土の契丹文哀冊は、幸にしてこれに對應すると確認される漢文哀冊が存在するため、羅・王兩氏はこの兩碑石の契丹文と漢文とを比較對照することによって日附を示す年月日、干支、數詞などの契丹文字と漢字との對譯を試みたのであった。

このように對譯の漢字と契丹文字とを比較する方法は、さきに紹介した戰後出土の新資料についても、厲鼎燿・鄭紹宗・陳述らの中國學者によつて試みられている（註⑧）が、それらはいづれも羅・王兩氏の研究をふまへながら進められてきたといつてよからう。

ところが後述するように（18ページ）、契丹文と漢文とはその言語構造が全く異なっており、當然哀冊文の内容も雙方に少なからぬ異同があるものと考えられることから、羅・王兩氏をはじめ多くの中國學者の苦心にもかかわらず、未知の契丹文字をただ漢文哀冊と對比して、特定の語彙、たとえば若干の固有名詞や數詞、または元號・年月日・干支などとかを對應させるだけの手段では、契丹小字の音價、一語（合成文字）の發音、ひいては一文のいみを解明することは困難である。いわんや契丹哀冊の全文解讀は至難の業であらう。

**戰後の契丹文字研究の動向** 漢文との對照によつてえた羅・王兩氏をはじめ中國諸學者の成果を参考にしながら、それとは異なる言語學的方法、主として契丹小字の音價を求めることを解讀への手がかりにしようとする試みが、戰後わが國の學者たちによつて考えられてきた。そのような試みに先鞭をつけたのは、註⑧にもあげた村山七郎「契丹文字解讀の方法」をはじめ、山路廣明『契丹語の研究』つづいて長田夏樹「契丹文字解讀の可能性」、田村實造・小林行雄『慶陵』<sup>1</sup>、第六章第四節「契丹文字の哀冊」、愛宕松男「契丹 *ᡤᡠᡵᡠᡳᡳᡤ* 文の解讀について」などの諸研究であつた。

まず村山教授の論文についてみると、氏は契丹小字を作つた送刺が、ウイグル人から習得したといわれる文字を古代突

厥文字と推測し、哀冊にみるような契丹文字を合成する小字を古代突厥文字のアルファベットと比較対照して、それぞれの音價を推定したのち、さらに進んで契丹語を本論文でも後述するように(19ページ)白鳥庫吉博士とポツペ博士との考説にもとづいてモンゴル語系と考え、これを羅福成の研究による道宗と宣懿皇后との「契丹字篆蓋釋文」にあてはめて、各字の音價と、そのいみとの推定を試みている。しかし、かりに村山教授の推定による小字の音價をみとめるならば、長田夏樹「契丹文字解讀の可能性」も指摘するように、突厥文字のアルファベットは約四〇個にすぎないのに、それと三〇〇個をこえる契丹小字との調整は、はたしてうまく行なわれるであろうか。また前述したように、契丹文字合成上における小字の配列順序を無視している点にも大きな疑問があるように考える。ともあれ小字の祖形を古代突厥文字のような表音文字に求めつつ、その音價を推定しようとした發想は、これまでの契丹文字研究法に一轉機を與えた點に大きないみをもつものと高く評價してよいであろう。

村山論文につづいて發表した著者ら田村・小林の「契丹文字の哀冊」(『慶陵』1、第六章條四節)については、その後氣づいた私見をもまとめて後述することにした。つぎに村山論文と著者らの研究成果とをふまえて、この文字の解讀へ新たな一石を投じたのは、愛宕松男「契丹 *Khitan* 文字の解讀について」である。愛宕教授は苦心の末に、これまで漢文哀冊との對比によって明らかにされてきた元號・干支・年月日・數詞などをふくむ12の文例の日附記載を有力な手がかりとして、これらを既知のモンゴル語と對照させつつ、五〇餘の字母(小字)の音價と、これとほぼ同數の字頭の音價とを考定している。

しかし疑問に思われるのは、果して契丹小字いわゆる字母(原字)は、その字劃をこのように細分解して、その各々にウイグル字や突厥文字のようにアルファベット式單一音價を與えうるものであろうか。後述する女眞文字から逆推すれば契丹小字は(𐰽𐰺)+(𐰽𐰺)、(𐰽𐰺)+(𐰽𐰺)あるいは(𐰽𐰺)+(𐰽𐰺)+(𐰽𐰺)などのような複合音價をもつものであろうと考えられる。第二の疑問は、氏は表意の大字と表音の小字とを區別することなく、すべてを一様に小字とみて

いるが、すでに推定したとおり表意の大字と表音の小字とは日本のかな文字と漢字とのまじり文のように、互にまじり合つて契丹語を寫したものとみるべきであろう。したがつて大字を小字と同様にみて細分解し、音價推定の材料とすることはできないと思う。最後に著者の「契丹文字解讀への試み」をのべることにするが、それには前提として契丹語の語系について考えてみる必要がある。

### 契丹語の語系について

これまで説明したところからも明らかなように、契丹文字では若干——二個ないし七個——の小字をもつて組み合わされた一合成文字のうちに、助詞や動詞の變化・助動詞などを示す接尾語がふくまれているという事實は、さきにも指摘したとおり契丹語が中國語（漢文）と系統を異にするアルタイ語系の言語であることをいみする。このことを具體的に説明しているのは、古く北宋の洪邁が『夷堅志』卷一八、丙志「契丹誦詩」の項の中に収めているつぎの一句である。

契丹の小兒は、はじめ漢文の書を讀むのに、まず俗語でその文句を顛倒して習っている。たとえば漢文で「鳥宿池中樹、僧敲月下門」という詩句をよむには、「月明のうちに和尚は門子を打ち、水の底裏の樹上に老鴉坐る」と

いう。これによると、契丹語は漢文におけるような語句の配列とは異なり、アルタイ語系のトルコ語やモンゴル語・マシウ語などと同じ構造・配列であることがわかる。

契丹語の研究は、すでに冒頭にものべたように、一九世紀前半以來クラブロートやショットらによつて著手されているが、それらはまだ未熟なものであった。かれらの研究成果を批判して契丹民族の歸屬や契丹語の位置づけに大きく貢獻したのは白鳥庫吉博士である。博士は『遼史』『契丹國志』『遼史拾遺』などの中國史書のうちから比較的確實と思われる契丹語を抽出し、それらを現在のアジア北方民族の諸語と比較した結果、その若干はモンゴル語で、他の一部はツングース語で解さうることを推論した（『東胡民族考』二四『白鳥庫吉全集』第四卷所收）。なおポッペ教授の研究（N. N. Poppe, “Über die Sprache der Dajuren”, Asia Major, Vol. X, 1934）によれば、ダフル語は中世モンゴル諸方言と大差なく、いわばモ

ンゴル語の古形をとどめる一方言であるという。そこで白鳥博士とポツペ教授との研究をあわせ考えると、契丹語は中世モンゴル語の系統に属するものとみてさしつかえないようであり、また慶陵壁畫に描かれている契丹人の容貌が今日のモンゴル人に酷似していることも、この推定を強める一傍證となるであろう。

### 契丹大字について

戦後日本の學者たちを中心に、契丹文字を漢字と對應させて比定するだけでなく、文字そのものの分析とその音價の推定など言語學的方法による解讀への努力がなされてきたことは、さきに紹介したとおりであり、このことは契丹文字の研究上に一轉機をもたらしたものである。しかしそれと並行して試みられねばならないのは、契丹大字の檢別とその確認とであると考ええる。そこで本項では、まず契丹大字の檢討からはじめることにしたい。

大字については、戦前から戦後にかけて羅福成・王靜如・鄭紹宗らの主として中國學者の努力によって、慶陵から出土した道宗皇帝と宣懿皇后との契丹文哀冊と漢文哀冊との對比、またケルヴィン師の一行によって臨摹された興宗皇帝と仁懿皇后との契丹文哀冊、あるいは『大金皇弟都統經略郎君行記碑』などから確認された各皇帝の元號の年月日にふくまれる契丹字の數詞や若干の名詞群が擧げられる。羅福頤「契丹國書管窺」は、契丹文哀冊中からこのような表意文字（大字）九四個を檢出してゐるが、これらのうち數詞群としては1〜10と20の計一個が確認される。そのほか漢字と對應して意味がば明らかになれる名詞群を、つぎに列挙してみよう。

### 名詞群

年（年・歲）	口年（同年または此年）	父（月）
穴失（正月）	天（日）	非（時） <sup>ㄅ</sup> ・口非（同時または此時）
天（天？）	主王（皇帝）	主介（皇后）
主介（皇太后）	主（勅） <sup>ㄅ</sup>	国（國）

ではこれらの文字をなぜ表意の大字と推定するのか。その理由をまず數詞群（1）から（10）まで、および（20）などに

ついでみよう。これまでの研究ではこれらの數詞は、一樣に小字と推定されており、たとえば愛宕教授は（1）をノと七、（10）を八と七、（20）を一と一に細分解して、その一つ一つに子音または母音の音價を與えている。ところが契丹文字にならって作られた女眞文字では、次章「女眞文字考」でも述べるように、數詞はことごとく表意文字であることから、契丹文字の數詞を表音の小字でなく表意の大字と推定する方が蓋然性が高いであろう。はじめ太祖阿保機は大字を創制するにあたり、各部落からの徴兵や徴税など社會生活上最も必要視された文字群のなかに、必ずや數詞をふくめたであろうことは充分に考えられるであろう。

つぎに年、月、日、皇帝、皇后、國などの名詞群も、表音の小字ではなく表意の大字とみるべきである。このほか小字を組み合わせた合成文字でなく、單獨の文字をもってそれぞれ獨立したいみ、つまり一語を表わすと思われる表意文字を、興宗・仁懿皇后・道宗・宣懿皇后の四面の哀冊文中に求めてみると、さきに列擧した數詞や若干の名詞のほか、重複するものを除いて一三〇ないし一四七字がかぞえられる。もちろん、これらが大字のすべてではなからうが、もしこれらを契丹大字だと推定すると、大字には字體が一・力・小・十・午・山・八・自・久・乙・水などのように、いみは異なるにしても漢字そのものか、または漢字の部首に似たものが少なくないこと。それとともにまた大字のなかには、小字としても採り入れられて音價を附與されたものもあることに氣づくであろう。このことは迭刺らが小字を制作するにあたり、すでにあった大字のうち少なからざる數を小字としても借用し、これらにそれぞれ音價を付與したのではないかということである。しかし、いつどのような場合に、大字が小字として借用されているのか、まだ明らかでない。當時の契丹人には、あるいは自明の約束ごとであったかも知れないが、今日のわれわれには、このことが契丹文字のしくみを理解するのに、いっそう困難を感じさせている。

**契丹小字について** 契丹小字が表音文字であること、また若干個の小字を合成して一語を寫すことができるなどについて、すでにこれまで説明したところからも知られるであろう。それでは、この小字の音價はどのように考えられる

か。さきに述べたように、従来おかたの學者は『遼史』『皇子表』に皇弟の迭刺がその聰敏とらねを買われ、太祖の命をうけてウイグル使節からその言語・書を學習したのち、契丹小字を制作したとあるのに拘泥とらねして、小字をウイグル字のアルファベットのようにに母音字・子音字に分離して考え、その結果小字いわゆる字母（原字）をより細分解し、これらにアルファベット式の單一な母音・子音をあてはめようとする試みがなされた。しかしすでに指摘したように、このような細分解には無理があり、むしろ契丹小字は表音文字の女眞小字や日本のかな文字などのように、數基の母音・子音から成る複合音價をもつものと考えられる。このような考えは女眞文字からの類推であるが、なおこれについては次章「女眞文字考」を参照されたい。

契丹小字の音價を探る上にさらに一つの手がかりになるのは、契丹文字を合成する小字のなから、名詞の格を示す助詞いわゆるテ・ニ・オ・ハや、動詞・助動詞の變化を示す接尾語などを表わす文字を検出することであろう。それは契丹語がアルタイ語系に屬する言語である以上、助詞と接尾語とはその特色ある要素をなすからである。それについては今後の研究にゆづるが、『慶陵』Iの附録「接尾語として用いられた契丹文字の類別表」(1)・(2)をも参照されたい。

### 三 女眞文字考

女眞文字の作製 女眞文字には契丹文字と同じく大字・小字の二種がある。そのうち大字は、金の太祖が天輔三年（一一一九）に完顏希尹に命じ、契丹文字の制度にならって作らせ頒行したという。その後第三代熙宗の天眷元年（一一三八）に小字が作られ、大字と小字とはともに行用されることになった。これについて『金史』卷七三、完顏希尹傳には、つぎのように傳える。

金人初無文字、國勢日強、與鄰國交好、迺用契丹字。太祖命希尹、撰本國字、備制度。希尹乃依倣漢人楷字、因契丹字制度、合本國語、製女直字。天輔三年八月字書成。太祖大悅、命頒行之。（中略）其後熙宗亦製女直字、與希尹所

製字俱行用。希尹所撰、謂之女直大字、熙宗所撰、謂之小字

この一文の大意をとれば、つぎのようである。

文字を有しなかった金朝では、建國草創のときは鄰國との通好文書に契丹字を借用していたが、やがて太祖は一族の完顔希尹に國字（女眞字）を製作するよう命じた。そこで希尹は（字形を）漢字の楷書體に倣い、契丹文字の制度しくみに因って女眞語に合うような文字を天輔三年（一一一九）八月に作り了った。太祖は大いによりこんで、この文字を頒行した。その後第三代目の熙宗は女眞字を製し、さきに希尹が製作した文字と併せ行用させた。希尹の製作したものを大字、熙宗の撰したものを小字といった。

なお女眞小字については『金史』卷四、熙宗本紀にも天眷元年（一一三八）正月元日に女直小字を頒布し、やがて八年を経た皇統五年（一一四五）五月に、はじめてこの新製小字を大字とともに行用することになったという。ちなみに『金史』の女直字は女眞字のこと、直も眞も同一音の譯字である。

**女眞大字と小字** 女眞文字作製の由來についてはほぼ明らかになったが、それでは女眞大字と小字とは、どのような文字をさすのか。再び「完顔希尹傳」に眼をうつすと、

「希尹の作った大字は」字形を漢字の楷書體に倣い、女眞語を寫すしくみは契丹文字の制度に因った。

というように、女眞大字は漢字の楷書體に似た字形であることが知られるが、具體的にはこれ以上明らかにされていないのが現状である。<sup>⑩</sup>

女眞小字については、さきにも引用したように『金史』熙宗紀と完顔希尹傳に「熙宗が新女眞字（小字）を作り、皇統五年以後希尹の作った舊女眞字（大字）と俱ともに行用させた」といえば、その後は大字と小字とが相併用されて女眞語を書き寫したものと解すべきであろう。このようにいえば、いちおう判ったような気がするが、「俱に行用」するとは、もっと具體的には大字と小字とをそれぞれ別個にして並用したというのか、または大字と小字とを交まじわせて共用したとい

うのかは、はっきりしない。そこで、このことを念頭におきつつ現存する女眞文字資料を検討してみよう。幸にして女眞文字については『大金得勝陀頌碑』をはじめ少なからざる金代の金石文や、また文書類には明代の數種の『女眞館譯語』が現存する。これには字形ばかりでなく漢字による音譯とその對譯も添えられており、さらに『女眞館譯語』にもとづいて Dr. Wilhelm Grube は勞作 Die Sprache und Schrift der Jüen『女眞語言文字考』すなわち女眞語・文字の漢字對譯字典を著わしている。現代音に直した譯音と漢譯についても、いちおう知られることは、契丹文字にくらべて研究上大の便があるといえる。ついでに女眞語・文字に關する現存の金石資料をつぎに列舉すると、

- (1) 大金得勝陀頌碑（この碑は後述するように、金の世宗大定三十五年七月の立石である）
- (2) 泰和題名殘石（一に「奥屯良弼餞飲碑」とも稱せられ、金の章宗泰和六年二月の刻石である）
- (3) 女眞進士題名碑（一に「宴臺碑」ともよばれ、金の哀宗正大元年の刻石。河南省開封縣城内の文廟に現存する）
- (4) 柳河半截山の摩崖碑（遼寧省柳河縣半截山にあり、「大金太祖息馬址碑」とも稱し、右に漢字、左に女眞字を對刻している）
- (5) 海龍楊樹林山の摩崖碑（遼寧省海龍縣）
- (6) 高麗北青城串山の摩崖碑（朝鮮咸鏡南道北靑郡俗厚面蒼城里に存し、稻葉岩吉博士によれば、元の後至元四年の刻という）
- (7) 慶源碑（もと朝鮮咸鏡北道慶源郡東原面禾末洞に存したものであるが、いまは韓國ソウル國立博物館に移さる）
- (8) 永寧寺碑（明の永樂十一年九月の建置にして、もと黑龍江口附近 Түр（特林）に存したが、いまはウラジオストクの市立博物館に保管されているという）

などが知られている。以上の碑文・刻石の解説については、安馬彌一郎『女眞文金石志稿』（昭和一八年三月刊）に詳しく、また石田幹之助「女眞語研究の新資料」（『桑原博士還曆記念東洋史論叢』所收）の註文にも詳しい解説がみえる。ちなみに、從來これらの碑文のはかに女眞文字を刻したものとして、韓國ソウル國立博物館收藏の圓鏡と八面鏡とが擧げられてきたが、兩面ともその鏡背の刻字は女眞字ではなく契丹文字であることが明らかなので、ここには省略する。



文書類の筆頭にあげられるのは、さきに紹介した『女眞館譯語』とそれに添付された「來文」とであろう。これについての解説は前記石田幹之助「女眞語研究の新資料」に詳しいので、ついて参照されたい。そのほか女眞語・文字の研究に關するものには、つぎのような諸論・著がある。

- 白鳥 庫吉 「契丹・女眞・西夏文字考」(『史學雜誌』九編一一號)  
 羽田 亨 「契丹文字の新資料」(『羽田博士史學論文集』下卷)  
 稻葉 岩吉 「北青城串山城女眞字摩崖考釋」(『青丘學叢』第二號)  
 石田幹之助 「女眞語研究の新資料」(前掲出)  
 渡邊蕨太郎 「女眞館來文通解」(大阪東洋學會刊『亞細亞研究』第一一號)  
 同 「金史名辭解」(昭和五年、大阪東洋學會發行)  
 同 「女眞語の新研究」(『亞細亞研究』第二一號)  
 山下 泰藏 「新女直國書碑に就いて」(『奉天滿鐵圖書館叢刊』第一八冊)  
 石濱純太郎 「滿蒙言語の系統」(岩波講座『東洋思潮』)  
 羅 福 成 「宴臺金源國書碑考」(北京大學『國學季刊』一卷四號)  
 同 「女眞國書碑跋尾」(『國立北平圖書館月刊』三卷四號)  
 同 「金泰和題名殘石」(『東北叢刊』第一七期民國二十年五月)  
 王 靜 如 「宴臺女眞文字進士題名碑初釋」(『史學集刊』第三期)  
 安馬彌一郎 「女眞文金石志稿」(昭和一八年三月刊)  
 山路 廣明 「女眞語解」(一九五六年一月刊)

これらのうち安馬氏の著書は一三〇ページ餘のプリント刷りにすぎないが、この書には『大金得勝陀頌碑』『宴臺女眞

進士題名碑』をはじめ、さきに列舉した『泰和題名殘石』以下六碑石に刻出された女眞文のほか「可陳山某克印」（間島和龍縣出土）、「移改達葛河謀克印」、「某公印」三銅印の女眞字刻文などを可能なかぎり判讀し、克明な譯解を附している。なかでも『大金得勝陀頌碑』と『女眞進士題名碑』（宴臺國書碑）との譯解は、もっとも參考に價する。なお後者については羅福成「宴臺金源國書碑釋文」（『考古』第五期、民國三五年二月刊）および王靜如「宴臺女眞文字進士題名碑初釋」（『史學集刊』第三期）など中國學者の研究も參考にしなければならない。

さて、本筋にかえて女眞字資料の検討に入ると、これまで女眞小字で書かれていたと考えられてきた『大金得勝陀頌碑』・『宴臺女眞進士題名碑』や、あるいは文書類の『女眞館譯語』の女眞文をみると、契丹文哀册や日本文と同様に、表意文字と表音文字まじりのものであることがわかる。それでは女眞の表意文字とは？それはたとえばグルーベ『女眞語言文字考』三四ページ「數目門」にみえる數詞を示す三〇個の文字とか、あるいはこの書の「天文門」・「地理門」以下各部門のなかからその一部を拾いあげても、つぎに列舉するように、

（女眞字に對する漢字の音譯）（漢字のいみ）

阿卜哈

天

一能吉

日

必阿

月

阿捏

年

捏年（厄林）

春（季）

朱阿（厄林）

夏（季）

卜羅（厄林）

秋（季）

禿厄（厄林）

冬（季）

京 國 諸 弗 兀  
 京 倫 勒 里 里  
 京 國 東 西 南 北

など枚舉に遑ないほどである。ちなみに、ここでは印刷の都合上女眞字をかかげることを省略した。

つぎに表音文字については、これもグルーベ本によって検討すると、母音は現在までに a 音に五種の文字、o 音に一種、u 音に二種、i 音に二種の文字を確認できる。そのほか、たとえば助詞のニを *do de*、またヲを *ba he* とするよう、滿洲語や蒙古語などと同じく、硬(男性)軟(女性)二様の母音があつて女眞語も母音調和をしていたものと考えられる。母音に對し子音は、漢字譯音からだけでは正確な檢別は困難であるが、これも滿・蒙語と同じく字頭音として大文字 N とする (ng)、K、G、H、B (P)、S、Sh、T (D)、L、M、Ch、J、Y、R、F、W が知られる。ただし、これらの子音は、契丹小字や、かな文字に似て複合音價、すなわち一字に  $\text{ㄱ} + \text{ㄴ}$  または  $\text{ㄷ} + \text{ㄴ}$  あるいは  $\text{ㄱ} + \text{ㄴ} + \text{ㄷ}$  などのように複數の子・母をふくむものである。そこで女眞の表意文字と表音文字とが巧みに交じり合つて女眞語を寫している二・三の文例をあげてみよう。

(1) 「來年」を女眞字で  $\text{ㄹ} + \text{ㄴ} + \text{ㄱ}$  と書くが、 $\text{ㄹ} + \text{ㄴ}$  は表音文字で、的溫と漢字音譯し、そのいみは動詞「來る」であり、 $\text{ㄱ}$  (阿捏) は前表にあげたように「年」の表意文字である。つまり表音文字と表意文字とを組み合わせ「來年」の語を作る。

(2) 「朔」を女眞字で  $\text{ㅅ} + \text{ㄴ}$  (一車一能吉) と書くが、 $\text{ㅅ}$  (一車吉) は表音文字で「新しい」「鮮」の意、 $\text{ㄴ}$  (一能吉)

は「日」の表意文字であるから、兩字をつないで「新しい日」すなわち朔（月のはじめ）とする。（①・②の文例は『女眞館譯語』）

(3) 集 孟 帀 突 右 集は表意文字、孟は表音文字で、助詞をあらわし、帀突右は表音文字で、巡狩する、巡察するで東に 巡狩する  
ある。（『大金得勝陀頌碑』）

こうしてみると助詞、形容詞、助動詞などは、いずれも表音文字であることがわかる。それでは女眞の表意文字・表音文字と女眞大字・小字との相關関係はどのように考えるべきであろうか。これについても契丹文字における大字＝表意文字・小字＝表音文字の關係を媒介にして考えると、女眞文字でも表意文字を大字、表音文字を小字と考えるべきではないかという推測が成り立つ。この推測をさらに進めると、これまで多くの人びとによって女眞小字だけで書かれていると思われる『大金得勝陀頌碑』をはじめとする諸碑文・諸印文、あるいは『女眞館譯語』などの女眞文は、大字と小字まじりのものであり、從來不明のため「まぼろしの文字」とされた女眞大字は、實は表意の女眞文字であることが知られる。なお女眞文では小字は合成文字としないで、かな文字のように一字づつ分離して、上から下に連ね、行は右から左へと列べる。この小字を組み合わせて合成文字を作らない點は、契丹小字といちじるしく異なるところである。女眞大字・小字をこのように考えれば、さきに疑問としておいた『金史』熙宗本紀にいう「女眞大字と小字とを俱に行用した」とは、日本文の漢字とかなとのまじり文のように、女眞語を寫すのに大字と小字をませあわせ、俱に補いつつ行用したとの意であることがわかるであろう。

## 註

① 女眞文字については本論文「女眞文字考」の條を参照されたい。西夏文字については、西田龍雄『西夏語の研究』上・下、『西夏文字』（紀伊國屋新書）など参照。パスバ文字については

村田治郎編『居庸關』I（一九五七年）、および N. N. Poppe, The Mongolian Monuments in Hpag-spa Script, 1957. など参照されたい。

② ケルヴィン師は中陵を道宗陵と推定しているが、すでに拙著『慶陵』Ⅰ、第七章「三陵の比定」の項で考證したように、實は中陵は興宗陵で、道宗陵は西陵に比定すべきであると考えらる。

③ 慶陵の哀冊碑石出土の状況や碑石が承德(熱河)に搬出され、さらに奉天(瀋陽)に運び去られるまでのいきさつについては、『慶陵』Ⅰ、第六章第一節「哀冊碑石の出土」の條に詳説しておいた。

④ 羅福成「契丹國書哀冊釋文考證」(『遼陽石刻集錄』卷四所收)、王靜如「遼道宗及宣懿皇后契丹國字哀冊初釋」(『中央研究院歷史語言學年刊』第三本四分、一九三三年)、同「契丹國字再釋」(同上等第五本四分、一九三五年)。

⑤ 契丹文字の小字(字母あるいは原字)の數については諸説があつて、いまのところ定かでない。たとえば、村山七郎「契丹文字解讀の方法」(『言語研究』一七・一八號、一九五一)には二二〇個をかぞえる。また長田夏樹「契丹文字解讀の可能性」(『神戶外大論叢』二ノ四、一九五一)には三二七個をあげるが、このなかには書體の相違によってやや字形を異にするものの、同一字母とみなしうるものもあるように思われるから、實際は三二七個よりは少ないであらう。

⑥ 蕭仲恭の契丹字墓誌銘については『考古』一九七三年五期に鄭紹宗「興隆縣梓木林子發現的契丹文墓誌銘」、王靜如「興隆出土金代契丹文墓誌銘解」の二論文が收められている。

⑦ 大定二十年、上(世宗)曰、契丹文字年遠、觀其所撰詩、義

理深微、慮女直字創製日近、義理未如漢字深奧(『金史』卷五一「選舉志」策論進士の條)。

⑧ 孟森「遼碑九種跋尾」(『國學季刊』第三卷三號、一九三三)、厲鼎煒「熱河契丹國書碑考」(『國學季刊』第三卷四號、一九三二)、羅福成「遼宣懿皇后哀冊釋文」(『滿洲學報』第二、一九三三)、王靜如「遼道宗及宣懿皇后契丹國字哀冊初釋」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第三本四分、一九三三) Jos. Mullie, "Les Sépultures de K'ing des Leao", *Young Pao*, Vol. XXX, No. 1—2, 1933. 金毓紱編『遼陵石刻集錄』上・下(奉天圖書館刊、一九三四)。本書の下冊第四卷には羅福成による興宗・仁懿皇后・道宗・宣懿皇后の各契丹字哀冊文の釋文および同氏の道宗・宣懿皇后國書(契丹文)哀冊考が、また第五卷には從來知られている契丹字關係資料についての釋文も附載されている。本書は戦前における契丹文字關係資料の集成である。王靜如「契丹國字再釋」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第五本四分、一九三五)、辛克鉉「契丹文哀冊について」(『青丘學叢』二八號、一九三七)、田村實造「遼の言語及び文字」(『東洋歴史大辭典』卷八、一九三七)、田村實造「遼朝帝后の哀冊と慶陵」(『滿洲學報』第七、一九四一)。

以上は戦前一九四五年ごろまでの契丹文字に關する主要な論著であるが、戦後すなわち一九四五年以後、契丹文字解讀への諸學者の關心は、いっそう高まり、かつ研究の進展もみられるが、これについては「契丹文字解讀への試み」の本文に詳説することにして、本註では参考のため戦後における研究論文をか

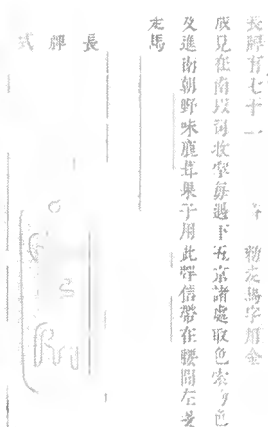
かざるにとどめた。

Feng Chia-Sheng (馮家昇), "The Ch'itan Script," *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 68, No. 1, 1948. Karl A. Witfogel, *History of Chinese Society*, Liao, 1949 p. 240—253. 羅福頤「契丹國書管窺」(『燕京學報』三十七期 一九四九)・村山七郎「契丹字解讀の方法」(山路廣明「契丹語の研究」第一輯、第二輯(一九五一)、長田夏樹「契丹文字解讀の可能性」、田村實造・小林行雄「慶陵」一、第六章第四節「契丹文字の哀冊」(一九五三年刊)。「慶陵」では道宗皇帝・宣懿皇后の契丹文哀冊と興宗皇帝・仁懿皇后の契丹文哀冊(筆寫されたもの)とを根本資料として言語學的方法にもとづき、契丹文字の字母、その合成法、字母の音價の推定および接尾語の類別表を別表(1)(2)として添付し、契丹文字解讀への模索を試みておいた。豊田五郎「契丹隸字考」(『東洋學報』四六ノ一)・愛宕松男「契丹 K'ida 文字の解讀について」(『東北大學文學部研究年報』第七號、一九五六年)、厲鼎燿「義縣出土契丹文墓志銘考釋」(『考古學報』一九五四年第八冊)、閻萬章「錦西孤山前土契丹文墓志研究」(『考古學報』一九五七年二期)、鄭紹宗「興隆縣梓木林子發現的契丹文墓志銘」(『考古』一九七三年二期)、王靜如「興隆出土金代契丹文墓志銘解」(『考古』同右)、陳述「跋吉林大安出土契丹文銅鏡」(『文物』一九七三年八期)、鄭紹宗「承德發現的契丹符牌」(『文物』一九七四年一〇期)。

⑨ 鄭紹宗「承德發現的契丹符牌」(『文物』一九七四年一〇號所

收)によれば、一九七二年冬河北省承德縣八家公社・深水河村から発見された金・銀符牌各一面の表面には同じ契丹文字がそれぞれ三字ずつ刻出されているが、その第一字目の主字は漢字の敕に相當するという(6圖)。これについて連想されるのは

6 圖



『燕北錄』にみえる契丹大字(敕・走・馬)

中國・河北省承德發現的契丹符牌、第一字目は敕字(『文物』一九七四年一〇月)

成吉思汗聖旨牌的裏面の契丹大字(走・馬)

『燕北錄』に收められた契丹の「長牌式」(6圖)にみえる契丹大字「敕・走・馬」の第一字「敕」字と主字とは相應じる文

字であり、また同じ6圖の左端の「成吉思皇帝聖旨牌」裏面の契丹大字「走・馬」は『燕北錄』の第二字と第三字とに相應じる文字とすれば、『燕北錄』のものの字形がいかに崩れているかが判るであろう。

⑩ かつて白鳥庫吉博士は「契丹女真西夏文字考」（『史學雜誌』第九編所收）に「大金皇弟都統郎君行記」の刻字を女真大字と

断定し、桑原隲藏博士も同意見であるが、今日ではこれは契丹文字であることが確認される。

また石田幹之助博士は、舊朝鮮總督府博物館（現韓國ソウル國立博物館）收藏の「高麗八角鏡」背面の異體四文字を女真大字と推定しているが（『史學雜誌』第五三編第七號彙報）、これも契丹文字であることは疑いない。

#### 四 三度び『大金得勝陀頌碑』女真文の解讀について

『大金得勝陀頌碑』の所在や體裁、またその碑面漢文の内容に關する解說・考證および碑陰の女真文の解讀などについて、かつて昭和一二二年六月〜八月刊の『東洋史研究』第二卷五六號誌上に「大金得勝陀頌碑の研究」と題して發表した。その後同じ題名の下に『中國征服王朝の研究』中卷の研究篇第二に、ほとんどそのままの内容で收めたが、ただ碑陰の女真文に關しては、文字の磨滅が甚しいことや女真語に關する知識が不充分であつたため不本意な點が多かつたので、本稿ではその後の知見をふまえつつ、三度びこの碑の女真文の解讀を試みることにした（圖版二参照）。

はじめに、この碑の所在と體裁についてくり返し紹介すると、「大金得勝陀頌碑」は中國東北地區の吉林省扶餘縣下——扶餘縣城の東北約一六〇華里——の石碑歲子部落に現存する。この地は拉林河の西岸に位置し、金朝の太祖阿骨打が遼軍と戦うため舉兵して麾下の將士に諭告し誓約をあたえた場所である。その後第五代の世宗（太祖の孫）は大定二五年（一一八五）に東北を巡幸したときこの地を訪ね、祖宗の戰勝を記念してこの碑を立てたという。碑面には漢字を、碑陰には女真文字をもって、その立石の由來が明記されている。碑石の全長は約二・四〇メートル、巾は約一メートル、兩面の漢字・女真文字ともに磨滅・損傷がひどく、その上に碑身は兩斷したらしく、いまはセメントで上下を接合している。篆額の

表面には、漢字で大金得勝陀頌の六字が二行に、その背面には一二字の女眞文字が三行に刻出されている。

碑身表面の漢文は、冒頭第一行の「大金得勝陀頌」の題銘につづいて本文の撰者、筆者、篆額の筆者三人の官職・姓名が三行には、第四行目からは序一六行、頌九行、最終行は立石の年時を附し、計三一行から成る。また碑陰の女眞文の書式は、碑面の漢文と同じく第四行以下の本文は序一七行、頌一一行のほか最終行に立石の年時を刻して計三三行をかぞえる。碑面の漢文と碑陰の女眞文との内容は、ほぼ同義である点からすると、おそらくまづ漢文が撰せられてのち、これを女眞文にほん譯したものであるう。そこで本章では碑陰の女眞文について、さきに疑問や不明のままに留めておいた數個所を改めて補訂することにした。なお今回の改訂にあたっては、安馬彌一郎『女眞文金石志稿』に收められた「大金得勝陀頌碑」の解讀に負うところがあつたことを記して、故人の靈に感謝の意を捧げる次第である。



## 〔丁〕

冬米斥土<sup>①</sup> 杀<sup>②</sup> 英雪洋斥<sup>③</sup> 杀<sup>④</sup> 阜仄<sup>⑤</sup>  
 〔安班安春温〕 你忽王眩葛蠻 你幹温  
 大金ノ得勝陀ノ頌

## 〔乙〕

笑仔……

## 〔己〕

东仄 ○ ○ ○ ○ 庄休素 ○ ○ 片余乞 ○ 更并 ○ ○ ○ 申秦史 …… 球  
 〔府温〕 寒里固 翰林 同知ノ 〔赤高〕 秃丹

## 〔戊〕

阜仄岂 ○ ○ 反弟杀仗带 ○ ○ ○ ○ 安米允 ○ ○ ○ 壹仗叔  
 幹温師 卜勒胡你 〔心忒黑塔〕 礼班 文〔忒黑〕

## 〔庚〕

英雪洋斥冬  
 〔聖眩葛蠻州〕 得勝陀州

## Ⅵ

天永益中崗止呈堂父益世<sup>①</sup>父斗左升奎車全伏丟羊受中○哥○率  
 太祖武元皇帝ノ軍師ヲ晩諭花地實録ニ從ウニ  
 太素鈔哈下皇帝以鈔師伯元忽黑土阿勤麻兒塔幹洪

## Ⅶ

天永益世東奔宋<sup>①</sup>走休列傷<sup>②</sup>草安<sup>③</sup>老<sup>④</sup>奇<sup>⑤</sup>在益世<sup>⑥</sup>尔<sup>⑦</sup>高<sup>⑧</sup>茂<sup>⑨</sup>前<sup>⑩</sup>受<sup>⑪</sup>兵<sup>⑫</sup>○○○  
 太祖軍師ヲ率イテ東流河ヲ渡リ衆軍ヲ  
 太素鈔師天非綱林必刺梁塔別軍思鈔師果ト元魯  
 フトゴトク〔会シタ?〕

## Ⅷ

天永崗崗<sup>①</sup>呈<sup>②</sup>姜<sup>③</sup>崇<sup>④</sup>关<sup>⑤</sup>件<sup>⑥</sup>更<sup>⑦</sup>写<sup>⑧</sup>房<sup>⑨</sup>库<sup>⑩</sup>太<sup>⑪</sup>竿<sup>⑫</sup>恭<sup>⑬</sup>可<sup>⑭</sup>反<sup>⑮</sup>受<sup>⑯</sup>中<sup>⑰</sup>父<sup>⑱</sup>角<sup>⑲</sup>右<sup>⑳</sup>  
 太祖武革梁亮替別一五太魯輪元迷見撒改阿的塔哈埋的味  
 太祖ハジメ高所一出デ立ツ国相撒改ヲ從イ来ル

## Ⅸ

今太夺希安<sup>①</sup>杀<sup>②</sup>并<sup>③</sup>赤<sup>④</sup>尔<sup>⑤</sup>弓<sup>⑥</sup>半<sup>⑦</sup>足<sup>⑧</sup>夹<sup>⑨</sup>条<sup>⑩</sup>得<sup>⑪</sup>列<sup>⑫</sup>木<sup>⑬</sup>美<sup>⑭</sup>受<sup>⑮</sup>卒<sup>⑯</sup>列<sup>⑰</sup>央<sup>⑱</sup>甘<sup>⑲</sup>灾<sup>⑳</sup>寸<sup>㉑</sup>  
 壓身ハ松ノ如ク乘リシ蒼黑イ馬ハ罔ノ如ク〔大ナリ?〕  
 阿赤ト魯智也和梁夏你都吧魯梅孩哈哈母林申志回吉伯梅

## Ⅹ

天永更<sup>①</sup>更<sup>②</sup>恭<sup>③</sup>可<sup>④</sup>反<sup>⑤</sup>灾<sup>⑥</sup>件<sup>⑦</sup>得<sup>⑧</sup>列<sup>⑨</sup>有<sup>⑩</sup>屈<sup>⑪</sup>杀<sup>⑫</sup>卒<sup>⑬</sup>恭<sup>⑭</sup>恭<sup>⑮</sup>卒<sup>⑯</sup>米<sup>⑰</sup>角<sup>⑱</sup>受<sup>⑲</sup>灾<sup>⑳</sup>灾<sup>㉑</sup>元<sup>㉒</sup>尔<sup>㉓</sup>……  
 太祖ナラビニ撒改ヲノ人馬ハ〔異常〕ノ爲シ来レルヲ其ノ  
 太素ト魯撒改阿的以程兒麻母林厄你撒幹非的者厄伯馬阿



ヲ〔伯  
治〔札  
メ撒  
タ孩  
リ

神祖ノ穆ヲ聖容ヲ  
 〔非如見忒〕〔保〕〔幹〕〔阿赤卜魯厄魯朵〕〔厄子〕〔黑恩〕〔幹黑〕  
 荒竿舟村米刃冬在米刃冬在乐舍冬笨笨允孫○更立○○○泉更○○○  
 〔XVI〕

[illegible]

(XIV)

武	{	鈔	缶	缶	缶
元	{	下	中	中	中
ノ	{	你	止	止	止
成	{	厄	○	○	○
巧	{	者	左	左	左
シ	{	貳	○	○	○
夕	{	黑	女	女	女
難	{	莽	升	升	升
事	{	葛	不	不	不
ヲ	{	車	洋	洋	洋
俣	{	別	父	父	父
ビ	{	別	走	走	走
テ	{	別	走	走	走

東〇〇 丙 東 孟 市 吳 右 〇 冬 夜 弟 草 未 老

〔車駕〕 東二 巡狩シテ 上 京ニトマル

〔諸勅失〕 吉牙魯味

〔幹〕 絹杲

〔別〕

## XVI

采夷弓洋父○不尾米<sup>①</sup>夫伴宋采米忠斗弟系……  
 塞吉革車  
 孝 悌  
 〔忘レ〕シメザラシムニ大イル喜ビ

不更东○屈走○益亥斥○○采米<sup>②</sup>○采要屯卡月  
 〔別府〕 厄納 元喜  
 富班  
 〔阿提米阿厄那國以阿〕  
 〔明〕年夏季四月

## XVII

英夷洋斥斥洋父冬采豆采五床刃冬開土采風采<sup>①</sup>○采<sup>②</sup>○開土采風采  
 怨王曜萬變  
 卓 幹 安着 香 失  
 孩 幹 國 倫 你 背 塞  
 塞  
 國 倫 你 背 塞  
 得勝陀  
 ヲ 悌 ビ テ  
 国 相 二商議スルニ 国 相 ハ

○鹿斥它風采○ ○ ○ ○ 鹿斥它風采带片采 ○ 采<sup>③</sup> 采<sup>④</sup> 采<sup>⑤</sup> 采<sup>⑥</sup> 采<sup>⑦</sup> 采<sup>⑧</sup> 采<sup>⑨</sup> 采<sup>⑩</sup> 采<sup>⑪</sup> 采<sup>⑫</sup> 采<sup>⑬</sup> 采<sup>⑭</sup> 采<sup>⑮</sup> 采<sup>⑯</sup> 采<sup>⑰</sup> 采<sup>⑱</sup> 采<sup>⑲</sup> 采<sup>⑳</sup> 采<sup>㉑</sup> 采<sup>㉒</sup> 采<sup>㉓</sup> 采<sup>㉔</sup> 采<sup>㉕</sup> 采<sup>㉖</sup> 采<sup>㉗</sup> 采<sup>㉘</sup> 采<sup>㉙</sup> 采<sup>㉚</sup> 采<sup>㉛</sup> 采<sup>㉜</sup> 采<sup>㉝</sup> 采<sup>㉞</sup> 采<sup>㉟</sup> 采<sup>㊱</sup> 采<sup>㊲</sup> 采<sup>㊳</sup> 采<sup>㊴</sup> 采<sup>㊵</sup> 采<sup>㊶</sup> 采<sup>㊷</sup> 采<sup>㊸</sup> 采<sup>㊹</sup> 采<sup>㊺</sup> 采<sup>㊻</sup> 采<sup>㊼</sup> 采<sup>㊽</sup> 采<sup>㊾</sup> 采<sup>㊿</sup> 采<sup>㋀</sup> 采<sup>㋁</sup> 采<sup>㋂</sup> 采<sup>㋃</sup> 采<sup>㋄</sup> 采<sup>㋅</sup> 采<sup>㋆</sup> 采<sup>㋇</sup> 采<sup>㋈</sup> 采<sup>㋉</sup> 采<sup>㋊</sup> 采<sup>㋋</sup> 采<sup>㋌</sup> 采<sup>㋍</sup> 采<sup>㋎</sup> 采<sup>㋏</sup> 采<sup>㋐</sup> 采<sup>㋑</sup> 采<sup>㋒</sup> 采<sup>㋓</sup> 采<sup>㋔</sup> 采<sup>㋕</sup> 采<sup>㋖</sup> 采<sup>㋗</sup> 采<sup>㋘</sup> 采<sup>㋙</sup> 采<sup>㋚</sup> 采<sup>㋛</sup> 采<sup>㋜</sup> 采<sup>㋝</sup> 采<sup>㋞</sup> 采<sup>㋟</sup> 采<sup>㋠</sup> 采<sup>㋡</sup> 采<sup>㋢</sup> 采<sup>㋣</sup> 采<sup>㋤</sup> 采<sup>㋥</sup> 采<sup>㋦</sup> 采<sup>㋧</sup> 采<sup>㋨</sup> 采<sup>㋩</sup> 采<sup>㋪</sup> 采<sup>㋫</sup> 采<sup>㋬</sup> 采<sup>㋭</sup> 采<sup>㋮</sup> 采<sup>㋯</sup> 采<sup>㋰</sup> 采<sup>㋱</sup> 采<sup>㋲</sup> 采<sup>㋳</sup> 采<sup>㋴</sup> 采<sup>㋵</sup> 采<sup>㋶</sup> 采<sup>㋷</sup> 采<sup>㋸</sup> 采<sup>㋹</sup> 采<sup>㋺</sup> 采<sup>㋻</sup> 采<sup>㋼</sup> 采<sup>㋽</sup> 采<sup>㋾</sup> 采<sup>㋿</sup> 采<sup>㌀</sup> 采<sup>㌁</sup> 采<sup>㌂</sup> 采<sup>㌃</sup> 采<sup>㌄</sup> 采<sup>㌅</sup> 采<sup>㌆</sup> 采<sup>㌇</sup> 采<sup>㌈</sup> 采<sup>㌉</sup> 采<sup>㌊</sup> 采<sup>㌋</sup> 采<sup>㌌</sup> 采<sup>㌍</sup> 采<sup>㌎</sup> 采<sup>㌏</sup> 采<sup>㌐</sup> 采<sup>㌑</sup> 采<sup>㌒</sup> 采<sup>㌓</sup> 采<sup>㌔</sup> 采<sup>㌕</sup> 采<sup>㌖</sup> 采<sup>㌗</sup> 采<sup>㌘</sup> 采<sup>㌙</sup> 采<sup>㌚</sup> 采<sup>㌛</sup> 采<sup>㌜</sup> 采<sup>㌝</sup> 采<sup>㌞</sup> 采<sup>㌟</sup> 采<sup>㌠</sup> 采<sup>㌡</sup> 采<sup>㌢</sup> 采<sup>㌣</sup> 采<sup>㌤</sup> 采<sup>㌥</sup> 采<sup>㌦</sup> 采<sup>㌧</sup> 采<sup>㌨</sup> 采<sup>㌩</sup> 采<sup>㌪</sup> 采<sup>㌫</sup> 采<sup>㌬</sup> 采<sup>㌭</sup> 采<sup>㌮</sup> 采<sup>㌯</sup> 采<sup>㌰</sup> 采<sup>㌱</sup> 采<sup>㌲</sup> 采<sup>㌳</sup> 采<sup>㌴</sup> 采<sup>㌵</sup> 采<sup>㌶</sup> 采<sup>㌷</sup> 采<sup>㌸</sup> 采<sup>㌹</sup> 采<sup>㌺</sup> 采<sup>㌻</sup> 采<sup>㌼</sup> 采<sup>㌽</sup> 采<sup>㌾</sup> 采<sup>㌿</sup> 采<sup>㍀</sup> 采<sup>㍁</sup> 采<sup>㍂</sup> 采<sup>㍃</sup> 采<sup>㍄</sup> 采<sup>㍅</sup> 采<sup>㍆</sup> 采<sup>㍇</sup> 采<sup>㍈</sup> 采<sup>㍉</sup> 采<sup>㍊</sup> 采<sup>㍋</sup> 采<sup>㍌</sup> 采<sup>㍍</sup> 采<sup>㍎</sup> 采<sup>㍏</sup> 采<sup>㍐</sup> 采<sup>㍑</sup> 采<sup>㍒</sup> 采<sup>㍓</sup> 采<sup>㍔</sup> 采<sup>㍕</sup> 采<sup>㍖</sup> 采<sup>㍗</sup> 采<sup>㍘</sup> 采<sup>㍙</sup> 采<sup>㍚</sup> 采<sup>㍛</sup> 采<sup>㍜</sup> 采<sup>㍝</sup> 采<sup>㍞</sup> 采<sup>㍟</sup> 采<sup>㍠</sup> 采<sup>㍡</sup> 采<sup>㍢</sup> 采<sup>㍣</sup> 采<sup>㍤</sup> 采<sup>㍥</sup> 采<sup>㍦</sup> 采<sup>㍧</sup> 采<sup>㍨</sup> 采<sup>㍩</sup> 采<sup>㍪</sup> 采<sup>㍫</sup> 采<sup>㍬</sup> 采<sup>㍭</sup> 采<sup>㍮</sup> 采<sup>㍯</sup> 采<sup>㍰</sup> 采<sup>㍱</sup> 采<sup>㍲</sup> 采<sup>㍳</sup> 采<sup>㍴</sup> 采<sup>㍵</sup> 采<sup>㍶</sup> 采<sup>㍷</sup> 采<sup>㍸</sup> 采<sup>㍹</sup> 采<sup>㍺</sup> 采<sup>㍻</sup> 采<sup>㍼</sup> 采<sup>㍽</sup> 采<sup>㍾</sup> 采<sup>㍿</sup> 采<sup>㏀</sup> 采<sup>㏁</sup> 采<sup>㏂</sup> 采<sup>㏃</sup> 采<sup>㏄</sup> 采<sup>㏅</sup> 采<sup>㏆</sup> 采<sup>㏇</sup> 采<sup>㏈</sup> 采<sup>㏉</sup> 采<sup>㏊</sup> 采<sup>㏋</sup> 采<sup>㏌</sup> 采<sup>㏍</sup> 采<sup>㏎</sup> 采<sup>㏏</sup> 采<sup>㏐</sup> 采<sup>㏑</sup> 采<sup>㏒</sup> 采<sup>㏓</sup> 采<sup>㏔</sup> 采<sup>㏕</sup> 采<sup>㏖</sup> 采<sup>㏗</sup> 采<sup>㏘</sup> 采<sup>㏙</sup> 采<sup>㏚</sup> 采<sup>㏛</sup> 采<sup>㏜</sup> 采<sup>㏝</sup> 采<sup>㏞</sup> 采<sup>㏟</sup> 采<sup>㏠</sup> 采<sup>㏡</sup> 采<sup>㏢</sup> 采<sup>㏣</sup> 采<sup>㏤</sup> 采<sup>㏥</sup> 采<sup>㏦</sup> 采<sup>㏧</sup> 采<sup>㏨</sup> 采<sup>㏩</sup> 采<sup>㏪</sup> 采<sup>㏫</sup> 采<sup>㏬</sup> 采<sup>㏭</sup> 采<sup>㏮</sup> 采<sup>㏯</sup> 采<sup>㏰</sup> 采<sup>㏱</sup> 采<sup>㏲</sup> 采<sup>㏳</sup> 采<sup>㏴</sup> 采<sup>㏵</sup> 采<sup>㏶</sup> 采<sup>㏷</sup> 采<sup>㏸</sup> 采<sup>㏹</sup> 采<sup>㏺</sup> 采<sup>㏻</sup> 采<sup>㏼</sup> 采<sup>㏽</sup> 采<sup>㏾</sup> 采<sup>㏿</sup> 采<sup>㐀</sup> 采<sup>㐁</sup> 采<sup>㐂</sup> 采<sup>㐃</sup> 采<sup>㐄</sup> 采<sup>㐅</sup> 采<sup>㐆</sup> 采<sup>㐇</sup> 采<sup>㐈</sup> 采<sup>㐉</sup> 采<sup>㐊</sup> 采<sup>㐋</sup> 采<sup>㐌</sup> 采<sup>㐍</sup> 采<sup>㐎</sup> 采<sup>㐏</sup> 采<sup>㐐</sup> 采<sup>㐑</sup> 采<sup>㐒</sup> 采<sup>㐓</sup> 采<sup>㐔</sup> 采<sup>㐕</sup> 采<sup>㐖</sup> 采<sup>㐗</sup> 采<sup>㐘</sup> 采<sup>㐙</sup> 采<sup>㐚</sup> 采<sup>㐛</sup> 采<sup>㐜</sup> 采<sup>㐝</sup> 采<sup>㐞</sup> 采<sup>㐟</sup> 采<sup>㐠</sup> 采<sup>㐡</sup> 采<sup>㐢</sup> 采<sup>㐣</sup> 采<sup>㐤</sup> 采<sup>㐥</sup> 采<sup>㐦</sup> 采<sup>㐧</sup> 采<sup>㐨</sup> 采<sup>㐩</sup> 采<sup>㐪</sup> 采<sup>㐫</sup> 采<sup>㐬</sup> 采<sup>㐭</sup> 采<sup>㐮</sup> 采<sup>㐯</sup> 采<sup>㐰</sup> 采<sup>㐱</sup> 采<sup>㐲</sup> 采<sup>㐳</sup> 采<sup>㐴</sup> 采<sup>㐵</sup> 采<sup>㐶</sup> 采<sup>㐷</sup> 采<sup>㐸</sup> 采<sup>㐹</sup> 采<sup>㐺</sup> 采<sup>㐻</sup> 采<sup>㐼</sup> 采<sup>㐽</sup> 采<sup>㐾</sup> 采<sup>㐿</sup> 采<sup>㑀</sup> 采<sup>㑁</sup> 采<sup>㑂</sup> 采<sup>㑃</sup> 采<sup>㑄</sup> 采<sup>㑅</sup> 采<sup>㑆</sup> 采<sup>㑇</sup> 采<sup>㑈</sup> 采<sup>㑉</sup> 采<sup>㑊</sup> 采<sup>㑋</sup> 采<sup>㑌</sup> 采<sup>㑍</sup> 采<sup>㑎</sup> 采<sup>㑏</sup> 采<sup>㑐</sup> 采<sup>㑑</sup> 采<sup>㑒</sup> 采<sup>㑓</sup> 采<sup>㑔</sup> 采<sup>㑕</sup> 采<sup>㑖</sup> 采<sup>㑗</sup> 采<sup>㑘</sup> 采<sup>㑙</sup> 采<sup>㑚</sup> 采<sup>㑛</sup> 采<sup>㑜</sup> 采<sup>㑝</sup> 采<sup>㑞</sup> 采<sup>㑟</sup> 采<sup>㑠</sup> 采<sup>㑡</sup> 采<sup>㑢</sup> 采<sup>㑣</sup> 采<sup>㑤</sup> 采<sup>㑥</sup> 采<sup>㑦</sup> 采<sup>㑧</sup> 采<sup>㑨</sup> 采<sup>㑩</sup> 采<sup>㑪</sup> 采<sup>㑫</sup> 采<sup>㑬</sup> 采<sup>㑭</sup> 采<sup>㑮</sup> 采<sup>㑯</sup> 采<sup>㑰</sup> 采<sup>㑱</sup> 采<sup>㑲</sup> 采<sup>㑳</sup> 采<sup>㑴</sup> 采<sup>㑵</sup> 采<sup>㑶</sup> 采<sup>㑷</sup> 采<sup>㑸</sup> 采<sup>㑹</sup> 采<sup>㑺</sup> 采<sup>㑻</sup> 采<sup>㑼</sup> 采<sup>㑽</sup> 采<sup>㑾</sup> 采<sup>㑿</sup> 采<sup>㒀</sup> 采<sup>㒁</sup> 采<sup>㒂</sup> 采<sup>㒃</sup> 采<sup>㒄</sup> 采<sup>㒅</sup> 采<sup>㒆</sup> 采<sup>㒇</sup> 采<sup>㒈</sup> 采<sup>㒉</sup> 采<sup>㒊</sup> 采<sup>㒋</sup> 采<sup>㒌</sup> 采<sup>㒍</sup> 采<sup>㒎</sup> 采<sup>㒏</sup> 采<sup>㒐</sup> 采<sup>㒑</sup> 采<sup>㒒</sup> 采<sup>㒓</sup> 采<sup>㒔</sup> 采<sup>㒕</sup> 采<sup>㒖</sup> 采<sup>㒗</sup> 采<sup>㒘</sup> 采<sup>㒙</sup> 采<sup>㒚</sup> 采<sup>㒛</sup> 采<sup>㒜</sup> 采<sup>㒝</sup> 采<sup>㒞</sup> 采<sup>㒟</sup> 采<sup>㒠</sup> 采<sup>㒡</sup> 采<sup>㒢</sup> 采<sup>㒣</sup> 采<sup>㒤</sup> 采<sup>㒥</sup> 采<sup>㒦</sup> 采<sup>㒧</sup> 采<sup>㒨</sup> 采<sup>㒩</sup> 采<sup>㒪</sup> 采<sup>㒫</sup> 采<sup>㒬</sup> 采<sup>㒭</sup> 采<sup>㒮</sup> 采<sup>㒯</sup> 采<sup>㒰</sup> 采<sup>㒱</sup> 采<sup>㒲</sup> 采<sup>㒳</sup> 采<sup>㒴</sup> 采<sup>㒵</sup> 采<sup>㒶</sup> 采<sup>㒷</sup> 采<sup>㒸</sup> 采<sup>㒹</sup> 采<sup>㒺</sup> 采<sup>㒻</sup> 采<sup>㒼</sup> 采<sup>㒽</sup> 采<sup>㒾</sup> 采<sup>㒿</sup> 采<sup>㓀</sup> 采<sup>㓁</sup> 采<sup>㓂</sup> 采<sup>㓃</sup> 采<sup>㓄</sup> 采<sup>㓅</sup> 采<sup>㓆</sup> 采<sup>㓇</sup> 采<sup>㓈</sup> 采<sup>㓉</sup> 采<sup>㓊</sup> 采<sup>㓋</sup> 采<sup>㓌</sup> 采<sup>㓍</sup> 采<sup>㓎</sup> 采<sup>㓏</sup> 采<sup>㓐</sup> 采<sup>㓑</sup> 采<sup>㓒</sup> 采<sup>㓓</sup> 采<sup>㓔</sup> 采<sup>㓕</sup> 采<sup>㓖</sup> 采<sup>㓗</sup> 采<sup>㓘</sup> 采<sup>㓙</sup> 采<sup>㓚</sup> 采<sup>㓛</sup> 采<sup>㓜</sup> 采<sup>㓝</sup> 采<sup>㓞</sup> 采<sup>㓟</sup> 采<sup>㓠</sup> 采<sup>㓡</sup> 采<sup>㓢</sup> 采<sup>㓣</sup> 采<sup>㓤</sup> 采<sup>㓥</sup> 采<sup>㓦</sup> 采<sup>㓧</sup> 采<sup>㓨</sup> 采<sup>㓩</sup> 采<sup>㓪</sup> 采<sup>㓫</sup> 采<sup>㓬</sup> 采<sup>㓭</sup> 采<sup>㓮</sup> 采<sup>㓯</sup> 采<sup>㓰</sup> 采<sup>㓱</sup> 采<sup>㓲</sup> 采<sup>㓳</sup> 采<sup>㓴</sup> 采<sup>㓵</sup> 采<sup>㓶</sup> 采<sup>㓷</sup> 采<sup>㓸</sup> 采<sup>㓹</sup> 采<sup>㓺</sup> 采<sup>㓻</sup> 采<sup>㓼</sup> 采<sup>㓽</sup> 采<sup>㓾</sup> 采<sup>㓿</sup> 采<sup>㔀</sup> 采<sup>㔁</sup> 采<sup>㔂</sup> 采<sup>㔃</sup> 采<sup>㔄</sup> 采<sup>㔅</sup> 采<sup>㔆</sup> 采<sup>㔇</sup> 采<sup>㔈</sup> 采<sup>㔉</sup> 采<sup>㔊</sup> 采<sup>㔋</sup> 采<sup>㔌</sup> 采<sup>㔍</sup> 采<sup>㔎</sup> 采<sup>㔏</sup> 采<sup>㔐</sup> 采<sup>㔑</sup> 采<sup>㔒</sup> 采<sup>㔓</sup> 采<sup>㔔</sup> 采<sup>㔕</sup> 采<sup>㔖</sup> 采<sup>㔗</sup> 采<sup>㔘</sup> 采<sup>㔙</sup> 采<sup>㔚</sup> 采<sup>㔛</sup> 采<sup>㔜</sup> 采<sup>㔝</sup> 采<sup>㔞</sup> 采<sup>㔟</sup> 采<sup>㔠</sup> 采<sup>㔡</sup> 采<sup>㔢</sup> 采<sup>㔣</sup> 采<sup>㔤</sup> 采<sup>㔥</sup> 采<sup>㔦</sup> 采<sup>㔧</sup> 采<sup>㔨</sup> 采<sup>㔩</sup> 采<sup>㔪</sup> 采<sup>㔫</sup> 采<sup>㔬</sup> 采<sup>㔭</sup> 采<sup>㔮</sup> 采<sup>㔯</sup> 采<sup>㔰</sup> 采<sup>㔱</sup> 采<sup>㔲</sup> 采<sup>㔳</sup> 采<sup>㔴</sup> 采<sup>㔵</sup> 采<sup>㔶</sup> 采<sup>㔷</sup> 采<sup>㔸</sup> 采<sup>㔹</sup> 采<sup>㔺</sup> 采<sup>㔻</sup> 采<sup>㔼</sup> 采<sup>㔽</sup> 采<sup>㔾</sup> 采<sup>㔿</sup> 采<sup>㕀</sup> 采<sup>㕁</sup> 采<sup>㕂</sup> 采<sup>㕃</sup> 采<sup>㕄</sup> 采<sup>㕅</sup> 采<sup>㕆</sup> 采<sup>㕇</sup> 采<sup>㕈</sup> 采<sup>㕉</sup> 采<sup>㕊</sup> 采<sup>㕋</sup> 采<sup>㕌</sup> 采<sup>㕍</sup> 采<sup>㕎</sup> 采<sup>㕏</sup> 采<sup>㕐</sup> 采<sup>㕑</sup> 采<sup>㕒</sup> 采<sup>㕓</sup> 采<sup>㕔</sup> 采<sup>㕕</sup> 采<sup>㕖</sup> 采<sup>㕗</sup> 采<sup>㕘</sup> 采<sup>㕙</sup> 采<sup>㕚</sup> 采<sup>㕛</sup> 采<sup>㕜</sup> 采<sup>㕝</sup> 采<sup>㕞</sup> 采<sup>㕟</sup> 采<sup>㕠</sup> 采<sup>㕡</sup> 采<sup>㕢</sup> 采<sup>㕣</sup> 采<sup>㕤</sup> 采<sup>㕥</sup> 采<sup>㕦</sup> 采<sup>㕧</sup> 采<sup>㕨</sup> 采<sup>㕩</sup> 采<sup>㕪</sup> 采<sup>㕫</sup> 采<sup>㕬</sup> 采<sup>㕭</sup> 采<sup>㕮</sup> 采<sup>㕯</sup> 采<sup>㕰</sup> 采<sup>㕱</sup> 采<sup>㕲</sup> 采<sup>㕳</sup> 采<sup>㕴</sup> 采<sup>㕵</sup> 采<sup>㕶</sup> 采<sup>㕷</sup> 采<sup>㕸</sup> 采<sup>㕹</sup> 采<sup>㕺</sup> 采<sup>㕻</sup> 采<sup>㕼</sup> 采<sup>㕽</sup> 采<sup>㕾</sup> 采<sup>㕿</sup> 采<sup>㖀</sup> 采<sup>㖁</sup> 采<sup>㖂</sup> 采<sup>㖃</sup> 采<sup>㖄</sup> 采<sup>㖅</sup> 采<sup>㖆</sup> 采<sup>㖇</sup> 采<sup>㖈</sup> 采<sup>㖉</sup> 采<sup>㖊</sup> 采<sup>㖋</sup> 采<sup>㖌</sup> 采<sup>㖍</sup> 采<sup>㖎</sup> 采<sup>㖏</sup> 采<sup>㖐</sup> 采<sup>㖑</sup> 采<sup>㖒</sup> 采<sup>㖓</sup> 采<sup>㖔</sup> 采<sup>㖕</sup> 采<sup>㖖</sup> 采<sup>㖗</sup> 采<sup>㖘</sup> 采<sup>㖙</sup> 采<sup>㖚</sup> 采<sup>㖛</sup> 采<sup>㖜</sup> 采<sup>㖝</sup> 采<sup>㖞</sup> 采<sup>㖟</sup> 采<sup>㖠</sup> 采<sup>㖡</sup> 采<sup>㖢</sup> 采<sup>㖣</sup> 采<sup>㖤</sup> 采<sup>㖥</sup> 采<sup>㖦</sup> 采<sup>㖧</sup> 采<sup>㖨</sup> 采<sup>㖩</sup> 采<sup>㖪</sup> 采<sup>㖫</sup> 采<sup>㖬</sup> 采<sup>㖭</sup> 采<sup>㖮</sup> 采<sup>㖯</sup> 采<sup>㖰</sup> 采<sup>㖱</sup> 采<sup>㖲</sup> 采<sup>㖳</sup> 采<sup>㖴</sup> 采<sup>㖵</sup> 采<sup>㖶</sup> 采<sup>㖷</sup> 采<sup>㖸</sup> 采<sup>㖹</sup> 采<sup>㖺</sup> 采<sup>㖻</sup> 采<sup>㖼</sup> 采<sup>㖽</sup> 采<sup>㖾</sup> 采<sup>㖿</sup> 采<sup>㗀</sup> 采<sup>㗁</sup> 采<sup>㗂</sup> 采<sup>㗃</sup> 采<sup>㗄</sup> 采<sup>㗅</sup> 采<sup>㗆</sup> 采<sup>㗇</sup> 采<sup>㗈</sup> 采<sup>㗉</sup> 采<sup>㗊</sup> 采<sup>㗋</sup> 采<sup>㗌</sup> 采<sup>㗍</sup> 采<sup>㗎</sup> 采<sup>㗏</sup> 采<sup>㗐</sup> 采<sup>㗑</sup> 采<sup>㗒</sup> 采<sup>㗓</sup> 采<sup>㗔</sup> 采<sup>㗕</sup> 采<sup>㗖</sup> 采<sup>㗗</sup> 采<sup>㗘</sup> 采<sup>㗙</sup> 采<sup>㗚</sup> 采<sup>㗛</sup> 采<sup>㗜</sup> 采<sup>㗝</sup> 采<sup>㗞</sup> 采<sup>㗟</sup> 采<sup>㗠</sup> 采<sup>㗡</sup> 采<sup>㗢</sup> 采<sup>㗣</sup> 采<sup>㗤</sup> 采<sup>㗥</sup> 采<sup>㗦</sup> 采<sup>㗧</sup> 采<sup>㗨</sup> 采<sup>㗩</sup> 采<sup>㗪</sup> 采<sup>㗫</sup> 采<sup>㗬</sup> 采<sup>㗭</sup> 采<sup>㗮</sup> 采<sup>㗯</sup> 采<sup>㗰</sup> 采<sup>㗱</sup> 采<sup>㗲</sup> 采<sup>㗳</sup> 采<sup>㗴</sup> 采<sup>㗵</sup> 采<sup>㗶</sup> 采<sup>㗷</sup> 采<sup>㗸</sup> 采<sup>㗹</sup> 采<sup>㗺</sup> 采<sup>㗻</sup> 采<sup>㗼</sup> 采<sup>㗽</sup> 采<sup>㗾</sup> 采<sup>㗿</sup> 采<sup>㘀</sup> 采<sup>㘁</sup> 采<sup>㘂</sup> 采<sup>㘃</sup> 采<sup>㘄</sup> 采<sup>㘅</sup> 采<sup>㘆</sup> 采<sup>㘇</sup> 采<sup>㘈</sup> 采<sup>㘉</sup> 采<sup>㘊</sup> 采<sup>㘋</sup> 采<sup>㘌</sup> 采<sup>㘍</sup> 采<sup>㘎</sup> 采<sup>㘏</sup> 采<sup>㘐</sup> 采<sup>㘑</sup> 采<sup>㘒</sup> 采<sup>㘓</sup> 采<sup>㘔</sup> 采<sup>㘕</sup> 采<sup>㘖</sup> 采<sup>㘗</sup> 采<sup>㘘</sup> 采<sup>㘙</sup> 采<sup>㘚</sup> 采<sup>㘛</sup> 采<sup>㘜</sup> 采<sup>㘝</sup> 采<sup>㘞</sup> 采<sup>㘟</sup> 采<sup>㘠</sup> 采<sup>㘡</sup> 采<sup>㘢</sup> 采<sup>㘣</sup> 采<sup>㘤</sup> 采<sup>㘥</sup> 采<sup>㘦</sup> 采<sup>㘧</sup> 采<sup>㘨</sup> 采<sup>㘩</sup> 采<sup>㘪</sup> 采<sup>㘫</sup> 采<sup>㘬</sup> 采<sup>㘭</sup> 采<sup>㘮</sup> 采<sup>㘯</sup> 采<sup>㘰</sup> 采<sup>㘱</sup> 采<sup>㘲</sup> 采<sup>㘳</sup> 采<sup>㘴</sup> 采<sup>㘵</sup> 采<sup>㘶</sup> 采<sup>㘷</sup> 采<sup>㘸</sup> 采<sup>㘹</sup> 采<sup>㘺</sup> 采<sup>㘻</sup> 采<sup>㘼</sup> 采<sup>㘽</sup> 采<sup>㘾</sup> 采<sup>㘿</sup> 采<sup>㙀</sup> 采<sup>㙁</sup> 采<sup>㙂</sup> 采<sup>㙃</sup> 采<sup>㙄</sup> 采<sup>㙅</sup> 采<sup>㙆</sup> 采<sup>㙇</sup> 采<sup>㙈</sup> 采<sup>㙉</sup> 采<sup>㙊</sup> 采<sup>㙋</sup> 采<sup>㙌</sup> 采<sup>㙍</sup> 采<sup>㙎</sup> 采<sup>㙏</sup> 采<sup>㙐</sup> 采<sup>㙑</sup> 采<sup>㙒</sup> 采<sup>㙓</sup> 采<sup>㙔</sup> 采<sup>㙕</sup> 采<sup>㙖</sup> 采<sup>㙗</sup> 采<sup>㙘</sup> 采<sup>㙙</sup> 采<sup>㙚</sup> 采<sup>㙛</sup> 采<sup>㙜</sup> 采<sup>㙝</sup> 采<sup>㙞</sup> 采<sup>㙟</sup> 采<sup>㙠</sup> 采<sup>㙡</sup> 采<sup>㙢</sup> 采<sup>㙣</sup> 采<sup>㙤</sup> 采<sup>㙥</sup> 采<sup>㙦</sup> 采<sup>㙧</sup> 采<sup>㙨</sup> 采<sup>㙩</sup> 采<sup>㙪</sup> 采<sup>㙫</sup> 采<sup>㙬</sup> 采<sup>㙭</sup> 采<sup>㙮</sup> 采<sup>㙯</sup> 采<sup>㙰</sup> 采<sup>㙱</sup> 采<sup>㙲</sup> 采<sup>㙳</sup> 采<sup>㙴</sup> 采<sup>㙵</sup> 采<sup>㙶</sup> 采<sup>㙷</sup> 采<sup>㙸</sup> 采<sup>㙹</sup> 采<sup>㙺</sup> 采<sup>㙻</sup> 采<sup>㙼</sup> 采<sup>㙽</sup> 采<sup>㙾</sup> 采<sup>㙿</sup> 采<sup>㚀</sup> 采<sup>㚁</sup> 采<sup>㚂</sup> 采<sup>㚃</sup> 采<sup>㚄</sup> 采<sup>㚅</sup> 采<sup>㚆</sup> 采<sup>㚇</sup> 采<sup>㚈</sup> 采<sup>㚉</sup> 采<sup>㚊</sup> 采<sup>㚋</sup> 采<sup>㚌</sup> 采<sup>㚍</sup> 采<sup>㚎</sup> 采<sup>㚏</sup> 采<sup>㚐</sup> 采<sup>㚑</sup> 采<sup>㚒</sup> 采<sup>㚓</sup> 采<sup>㚔</sup> 采<sup>㚕</sup> 采<sup>㚖</sup> 采<sup>㚗</sup> 采<sup>㚘</sup> 采<sup>㚙</sup> 采<sup>㚚</sup> 采<sup>㚛</sup> 采<sup>㚜</sup> 采<sup>㚝</sup> 采<sup>㚞</sup> 采<sup>㚟</sup> 采<sup>㚠</sup> 采<sup>㚡</sup> 采<sup>㚢</sup> 采<sup>㚣</sup> 采<sup>㚤</sup> 采<sup>㚥</sup> 采<sup>㚦</sup> 采<sup>㚧</sup> 采<sup>㚨</sup> 采<sup>㚩</sup> 采<sup>㚪</sup> 采<sup>㚫</sup> 采<sup>㚬</sup> 采<sup>㚭</sup> 采<sup>㚮</sup> 采<sup>㚯</sup> 采<sup>㚰</sup> 采<sup>㚱</sup> 采<sup>㚲</sup> 采<sup>㚳</sup> 采<sup>㚴</sup> 采<sup>㚵</sup> 采<sup>㚶</sup> 采<sup>㚷</sup> 采<sup>㚸</sup> 采<sup>㚹</sup> 采<sup>㚺</sup> 采<sup>㚻</sup> 采<sup>㚼</sup> 采<sup>㚽</sup> 采<sup>㚾</sup> 采<sup>㚿</sup> 采<sup>㞀</sup> 采<sup>㞁</sup> 采<sup>㞂</sup> 采<sup>㞃</sup> 采<sup>㞄</sup> 采<sup>㞅</sup> 采<sup>㞆</sup> 采<sup>㞇</sup> 采<sup>㞈</sup> 采<sup>㞉</sup> 采<sup>㞊</sup> 采<sup>㞋</sup> 采<sup>㞌</sup> 采<sup>㞍</sup> 采<sup>㞎</sup> 采<sup>㞏</sup> 采<sup>㞐</sup> 采<sup>㞑</sup> 采<sup>㞒</sup> 采<sup>㞓</sup> 采<sup>㞔</sup> 采<sup>㞕</sup> 采<sup>㞖</sup> 采<sup>㞗</sup> 采<sup>㞘</sup> 采<sup>㞙</sup> 采<sup>㞚</sup> 采<sup>㞛</sup> 采<sup>㞜</sup> 采<sup>㞝</sup> 采<sup>㞞</sup> 采<sup>㞟</sup> 采<sup>㞠</sup> 采<sup>㞡</sup> 采<sup>㞢</sup> 采<sup>㞣</sup> 采<sup>㞤</sup> 采<sup>㞥</sup> 采<sup>㞦</sup> 采<sup>㞧</sup> 采<sup>㞨</sup> 采<sup>㞩</sup> 采<sup>㞪</sup> 采<sup>㞫</sup> 采<sup>㞬</sup> 采<sup>㞭</sup> 采<sup>㞮</sup> 采<sup>㞯</sup> 采<sup>㞰</sup> 采<sup>㞱</sup> 采<sup>㞲</sup> 采<sup>㞳</sup> 采<sup>㞴</sup> 采<sup>㞵</sup> 采<sup>㞶</sup> 采<sup>㞷</sup> 采<sup>㞸</sup> 采<sup>㞹</sup> 采<sup>㞺</sup> 采<sup>㞻</sup> 采<sup>㞼</sup> 采<sup>㞽</sup> 采<sup>㞾</sup> 采<sup>㞿</sup> 采<sup>㟀</sup> 采<sup>㟁</sup> 采<sup>㟂</sup> 采<sup>㟃</sup>

## XIX

今宋乐伏○牟父史东卒○支南右南牟父○○○全  
 阿赤ト魯 脈見 幹温 別弗忒 奎勒哈察哈 幹温 哈兒  
 聖 頌碑 アリ。今コレヲ 見テ 頌碑〔ヲ刻シ字ヲ建テ〕

## XX

今太僕丞亮英更夫孟仲父曼閑土采風丞更○所友宋○友○更聚  
 阿赤ト魯 和 失兒哈赤 失替孩 國倫 你背塞 別 召利吉撒 阿 別  
 聖 迹〔ヲ勸スハ義トシテ允ナラン〕 國 相 カク奏セバ

## XXI

采兒倪左仲便弔父仗乞孟如卓孟並升父更列尔孟有丙更更孟  
 阿剌瓦 ト幹尼理見蘇可 答忒黑以 住兀 采思忒黑伯 監林 恩 別 未巴勒  
 勅シテ 臣 人 可〔念〕マニ 文字ノ 道 ヲ以テ 罪 ヲ 翰林ニ〔待ツ〕 然レバ則チ

父友孟升杰茶采○帝史南父○○○友○倪左乞睪曼升冬冬茂庄○  
 昌悉忒 失黑札 撒富 塔伯 答魯 刺 ト幹尼以 厄着黑 塞魯罕 寒  
 成 功 ヲ〔頌美スルハ〕 臣 ノ 官 駟 ナリト 敢テ

不茂灰○○○○更史仗史亮父並和<sup>⑤</sup>○  
 已撒 別 忒黑伯 忒魯忒 赫路塞  
 再ビ 文ヲ進メテ 謂ウ







(XVI)

米血屏<sup>④</sup> 米<sup>④</sup> 血<sup>④</sup> 屏<sup>④</sup> 米<sup>④</sup> 血<sup>④</sup> 屏<sup>④</sup>  
住希 阿刺魯 以撒必申  
 敵ヲ敗ルノ祥符

米血<sup>④</sup> 屏<sup>④</sup> 米<sup>④</sup> 血<sup>④</sup> 屏<sup>④</sup>  
住希 阿刺魯 以撒必申  
 敵ヲ敗ルノ祥符

早可<sup>①</sup> 早<sup>①</sup> 可<sup>①</sup> 早<sup>①</sup> 可<sup>①</sup>  
以 幹ト麻都魯  
 易ノ經ニ明ナリ

冥采<sup>①</sup> 冥<sup>①</sup> 采<sup>①</sup> 冥<sup>①</sup> 采<sup>①</sup>  
密你鈔哈亮 尼林因  
 我が軍 雲ノ如ク

〇〇〇〇 戌<sup>④</sup> 戌<sup>④</sup> 戌<sup>④</sup> 戌<sup>④</sup>  
着味  
 照ラス

空文<sup>①</sup> 空<sup>①</sup> 文<sup>①</sup> 空<sup>①</sup> 文<sup>①</sup>  
失尼勤ト  
 諸君コレ〔勉メヨ〕

矢<sup>①</sup> 矢<sup>①</sup> 右<sup>①</sup> 屏<sup>①</sup> 〇<sup>①</sup> 〇<sup>①</sup>  
華ト味希 尼勤  
 名付ゲント欲ス コノ〔地三〕

米<sup>①</sup> 米<sup>①</sup> 〇<sup>①</sup> 米<sup>①</sup> 〇<sup>①</sup> 米<sup>①</sup> 〇<sup>①</sup>  
非果 厄 着厄 多羅  
 マジナイノ讓禮ノ法ハ

南<sup>①</sup> 南<sup>①</sup> 中<sup>①</sup> 采<sup>①</sup> 采<sup>①</sup> 采<sup>①</sup> 采<sup>①</sup>  
果都哈厄 當下阿的  
 〔戈甲相屈〕

天<sup>①</sup> 天<sup>①</sup> 存<sup>①</sup> セシ<sup>①</sup> 道<sup>①</sup> ハ  
阿哈別都塔 洪住兀

屏<sup>①</sup> 走<sup>①</sup> 走<sup>①</sup> 走<sup>①</sup> 走<sup>①</sup> 走<sup>①</sup>  
希納孩

堯<sup>⑤</sup> 堯<sup>⑤</sup> 血<sup>⑤</sup> 血<sup>⑤</sup> 受<sup>⑤</sup> 受<sup>⑤</sup> 受<sup>⑤</sup> 受<sup>⑤</sup>  
元里住兀 塔哈魯 牙ト魯  
 神道ニ順イテズルナリ

受<sup>⑤</sup> 受<sup>⑤</sup> 受<sup>⑤</sup> 受<sup>⑤</sup> 受<sup>⑤</sup> 受<sup>⑤</sup> 受<sup>⑤</sup>  
別黑 委勤弗厄  
 有リシ事ナリ古ヨリ〔自古有之〕

堯<sup>⑤</sup> 堯<sup>⑤</sup> 血<sup>⑤</sup> 血<sup>⑤</sup> 受<sup>⑤</sup> 受<sup>⑤</sup> 受<sup>⑤</sup> 受<sup>⑤</sup>  
見脱希都塔洪  
 神火存セリ

天<sup>①</sup> 天<sup>①</sup> 存<sup>①</sup> セシ<sup>①</sup> 道<sup>①</sup> ハ  
厄勤以哥塞忒比 牙素  
 斯クノ如ク常ニ〔明ラカナリ〕

XXVII

國土度尻〇〇〇全判中  
國倫ト  
 國家  
興ルニ

親途尻床代尻〇  
徹心申  
 祥符  
厄勤徹  
 知ル

冬無寒血中各列尚益〇  
州  
 周武軍  
鈔哈阿素因  
 勤イテ  
元魯

余米度尻半戊〇〇  
王你ト  
 王ノ屋(家)ニ火(流ル)  
果腹養

〔庄〕示〇父全判〇  
罕素  
 漢祖  
伯  
 ヲ興シ

〇〇並米批卒更床  
帝你  
 〔赤〕帝ノ子生レタリ。  
追半別厄

乾〇〇右火尻〇乏  
徹必  
 祥  
味伯礼  
 納

阜至太矣界半五尤冬  
翰着厄云塞  
 曰ウ真ニアラス  
孰云非真

並並米采太示又枝丹赤  
思忒  
 四到シカノ  
塞音素温  
 宗  
元  
 〔治使宗元〕

XXVIII

件免有火艾更矣迄  
兀ト伯嘗吉赤  
 哈

面糸京又乾月〇五  
子  
 敗リシ祥  
阿到預徹ト弄  
 食

兄文屯列半寒受尔友  
厄森因  
 日ノ如ク  
幹  
 阿到  
成采干  
 今ニ至ルモ  
都魯利

弟  
 东寒它五火汎  
徹利大  
 旧ノ  
 老(遺老)

カ支它卧左南  
厄勤香勤以知干厄都魯  
 コノ事ノ

令火斥土米吞它允  
阿赤ト魯嘗温  
 聖  
 金ノ天子  
你阿哈以追  
 武元  
鈔哈  
 孫コレ  
下你幹美羅厄勤

## XXV

此件南件 ○○○○<sup>①</sup> 求  
元聖替替替  
 北ヨリ南ヨリ

屏屈參見 ……  
希 塞者

东史園土羊止 ○右朱虎  
希厄國倫  
 旧 国(邦) 二 下 味干別  
 至リテ

竹安參采益 ○○○

寧佳本註塞 吧 元魯

六度 飛ビ

竹安參采益 ○○○

寧佳本註塞 吧 元魯

六度 飛ビ

○○○ 东史 ○屏至

希厄 希納

旧 義

米岌参采洋 ○

厄灣

思イ難事

今史元化史

阿来ト魯馬法以

聖祖

茶南參 ○史向夫系米史

撒答塞

南ク

伯 元聖阿刺瓦厄魯

ヲ 勅シテ(今我列祖開創之勳)

## XXVI

航土參早角參我洋參 ○參  
厄都温采羅的塞 阿哈采  
 風 ニ(柳リ) 雨 ニ(沐シ)

參米夫恭見示勿关良史  
安班札撒孩  
 大イニ治メタリ。

今史參早參 寸巾 ○○  
阿来ト魯厄魯 輪厄一車  
 聖容 既一新

今史又参五升 ○○○○

…… 典史斥

爰又参东史 ○史

○色 参史 史史

聖 功(既ニ高シ)

ナラヒニ 旧

ソノ天佑得勝ノ事ヲ

XXXI

冥糸冠我矢美受斥  
密你馬法華ト別  
我が祖 名ツケタルヲ

カ支穴既矢穴夷更矢斥  
厄勤香勤伯 塞魯知理香厄魯吉  
コノ事ヲ 詔シテ

萬友父朕帝六伏更舉糸朕  
塞埋厄塔 覺黑思塞厄  
美シスル 声(讀声)賞シ

伍五余六苗○五更  
兀思王 塔 失黑  
文王声 アリ

米余○○○更○○○○  
王(王) 並

元祀父更五升○○升式才○  
馬法以目忒失黑 黑非構  
祖ノ成シタ 輝カシ

南无○○

一那  
コレ

舍穴今更  
阿茶ト魯厄黑  
聖明

並○余○華○我臣所  
帝(帝)王(王) 撒必申  
祥符

XXXII

五并糸天弓去茶○  
四千阿理 塞吉華扎撒  
千年 荐 治

片号美五片糸抱五更  
吉希聖ト失吉塞華思都魯  
姫

方尾米又既矢穴○  
土滿礼班 塞魯  
万世ニ 詔ス

条米乐申更  
安班 南哈孩  
大 定

云社糸  
傳林 唯扎 阿理  
二十五年

廿月文地日写末  
納丹 崇所 峰林 礼因(能言)立受  
七月二十八日立ツ

## 備考

## 〔題額及び〕

- ① 安春溫 女眞語『金』をいう。トルコ語で金を *altun* (突厥碑文によれば古代トルコ語も同様である)、蒙古語で *altan* といへば、安春溫 (あるいは安出・按春) は、おそらくこの *altun*, *altan* の訛った *alcun* を寫したものであろう。ところが『金史』卷二四、地理志の序に

國言金曰按出虎、以按出虎水源於此、故名金源、建國之號蓋取諸此

とて女眞語では金を按出虎といい、金朝の國號は實に按出虎水に由來すという。

按出虎水は一に、阿注潚 (元額婁室神道碑) 阿觸胡・阿朮火 (三朝北盟會編) 阿之古 (高麗史) 阿勒楚喀 (吉林外記) とか、また『金史』には阿朮潚・按出潚・安朮虎・案出潚などとも書かれているが、いずれも *alcun + ko, ka (ga, go)* を寫したものとみるべく、虎・潚・胡・火・古・喀は *diminutive suffix* の *ko, ka (ga, go)* にあたる。したがって「按出虎」は嚴密には「金色を帯びたる」、「金色がかった」の意であろう。張棣の『金虜節要』(「建炎以來繫年要錄」卷一所引)によれば

以本土愛新 (阿祿阻) 爲國號、愛新女眞語金也、以其水生金而名之、猶遼以遼水名國也

とて、按出虎水に金を産したために、かく名づけたという。

ちなみに、この河は現在は阿什河とよばれているが、これはおそらく滿洲語で金をいみする *asin* の音譯であろう。

- ② 你 *Genivus* (一格) を示す助詞で、前にくる名詞の語尾が *o* で終るときに用いられ、その他で終るときは「以」となる。

- ③ 忽土皚葛蠻 『金史』地理志、上京路會寧府の條に

有得勝陀、國言忽土皚葛蠻、太祖誓師之地也

とある。從來これについては異説多く、乾隆の『欽定金史語解』(卷三)には滿洲語「額勒赫」(elhe=安々)格們(gemun=京)の義といい、『吉林外記』(卷九)は滿洲語、額特赫(etehe=勝ちたる)噶珊(gasan=村)、『吉林通志』(卷二〇)は額特赫格們、「東三省輿地圖說」には額特勝噶珊という。松井等氏は、「忽土皚」は滿洲語 etembi(勝つ)の過去形 etehe「葛蠻」は givamun(驛站)にあたる語であるという(『滿洲歴史地理』第二、一七二頁)。ところが、いま女眞字をみると、忽土にあたる文字は「勝つ」を示す女眞字「厄忒昧」とは全く異なるので、そのいみは他に求めなければならない。

女眞語で「福」を「忽禿兒」(グルーベ)、「忽禿力」(阿波本・靜嘉堂本)、滿洲語で huturi という。終りの「ゝ」あるいは「は」は suffix とみるべく(出村良一「滿洲語及び通古斯語に於ける動詞轉化の接尾語に就いて」『東洋學報』第一八卷第三號)、また Klaproth の Glück を女眞語 Chudu, 滿洲語 Chuturi とする(Asia Polyglotta p. 293) の語根は「忽禿」に就いて、『金史國語解』にも與、人同受「福曰忽都」という。これはトルコ語 qut=das Glück (Radloff, Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte II. p. 990)に淵源を求められないであらうか。この qut は Orkhon 碑文や Sine-usu 碑文や Uigur 語語文獻にもしばしばみえる。したがって「忽土皚」はむしろこれに緣故を有するものとみるべく、qut+ka「福ある」、「福を得たる」の義にして、kai の「は」は出村良一氏も指摘されたように(前掲論文)滿洲語の古形としての女眞語に保存されているものである。つぎに「葛蠻」(kaman or khama)は、得勝陀の陀に「險惡なる通路、崖際」などの意があることから推して、滿洲語 kamni(隘口、關口)と同義ではあるまいか。

以上によって、忽土皚葛蠻は「福を得たるの關隘」、「吉祥ある關口」の意とみるべく、これを碑面漢文の第二二行「太祖曰、此殆吉祥、天地協應、吾軍勝敵之驗也、(中略)若大事克成、復會於此、當爵而名之、後以是名賜其地」とあるに照するときは、けだし思いなかに過ぎるものがある。そこで得勝陀とは女眞語「忽土皚葛蠻」の意譯であらう。ちなみに、本碑文を通じて推測したところによれば、單にこの語のみにとどまらず、女眞語——したがって滿洲語に

對しても同様にいえようが——の中にはトルコ語・蒙古語に系統を引くものがかかなり多くあることは注目すべきである。

- ④ 幹溫 女眞語では石を、「幹黑」といい、滿洲語では *wche* である。これから推して「幹溫」は碑面漢文の頌碑にあたるものと考えたい。

なお以下に引用する『華夷譯語』は主としてグルーベ本 W. Grube, *Die Sprache und Schrift der Jücen*. (Leipzig 1896) によった。また東洋文庫・靜嘉堂文庫・徳島市阿波國文庫藏の女眞館譯語はそれぞれ東洋文庫本・靜嘉堂本・阿波國文庫本と略稱することとした。ここにいう靜嘉堂文庫本とは石田幹之助氏が發表された「女眞語研究の新資料」(『桑原博士還曆記念東洋史論叢』所收) 中の女眞語彙をさし、阿波國文庫本とは外山軍治博士が同文庫本によって手鈔したもののである。

## 〔I〕〔II〕〔V〕

この三行はそれぞれ撰文・書丹・篆額をものした人びとの官銜を記したものとおもわれるが、いずれも明晰を缺いている。〔III〕の「寒里因」は、翰林の音譯かと思われるが、XXI 行にみえる「監林」とは女眞字も漢字の譯字も異るところを注意しておく。

## 〔VI〕

- ① 鈔師 軍または武で鈔哈は滿洲語 *cooha* にあたるが、もともとその語幹は鈔 *coo* にあるものと思う。突厥碑文によくみる *si* (軍隊) はこれと同系統であろう。

- ② 伯 助詞で滿洲語 *be* と同じ。

- ③ 兀忽黑 「黑」は動詞過去形語尾、その現在不定法は「兀忽理」。

## 〔VII〕

- ① 「宋」は滿洲語の *sa* と同じく *Past Gerund* を示す接尾語である。
- ② 必刺 *グルーベ* 本には「必阿」として月と同じ發音であるが、阿波本・靜嘉堂本の「必刺」が正しい。滿洲語 *bra* に同じ。

- ③ 朶 助詞で滿洲語 *de* に同じく助詞のニまたはヲである。

- ④ 塔別「別」は *Past Gerund* で、語幹「塔」は滿洲語 *dabambi* 蒙古語 *dabamoi*、ともに過グ・越エル・踰過スルの意か。

- ⑤ 革恩「革恩阿捏」が多年の意であるから、「革恩」は多イ、衆イの意を有する形容詞である。

- ⑥ この字はニカラを示す助詞である。

- ⑦ 果ト兀魯 華夷譯語に「戈迷吉果ト連」＝寛饒とある。「戈迷吉」は長キ、寛ナルの意で、「吉」は形容詞語尾である。

「ト連」は使役を示す動詞接尾語であるから寛饒ナラシメルである。したがって「果」には饒の意があるものと考える。「ト兀魯」は滿洲語 *burtai*、都テ、全テ、より推して「果ト兀魯」をコトゴトクと譯した。

# Ⅶ

- ① この二字は發音不明であるが、おそらくハジメあるいは先ヅの意を有するもので、滿洲語 *neden*, *neneme* などにあてらるべきであろうか。

- ② 木魯 過去を示す動詞尾である。

- ③ 幹兀迷兒(?) この三字は碑面漢文と對比するときは、まさしく『國相』にあたると思われるが、在手の拓本は字劃鮮明を缺くため、しばらく疑にとどめておく。

- ④ 塔哈埋 埋は動詞の不定法語尾であるが、つぎに「的昧」(來ル)をともしうため順ヒ來ルと解した。このような例は、女眞館來文でもよく見るところである。



## [K]

- ① 孩 この語は動詞過去を示す接尾語である。
- ② 哈哈 この語はトルコ語・蒙古語 *haha* (着イ) にあたるものであろう。
- ③ この語は三字の中、二字とも發音不明であるが、*Klaproth* によれば、*Hoch* を女眞語では *Cheshite* ともいうと (*Asia Polyglotta* p. 293)。なお本行は XXIV 行六・七・八段と對照すれば發明するところがあろう。

## [X]

- ① XXV 行七段と比較して敵と譯した。
- ② 瑣塞魯 この語は滿洲語 *sosambi*、人口ヲ擄掠スルと同義語であらう。
- ③ 一兒厄 グルーベ本には「一兒厄伯」を百姓という。ただし「伯」は助詞ヲを示す。これはおそらく蒙古語・滿洲語の *ingen* にあたり、突厥碑文の *in* と同語源をおなじくするものであろう。
- ④ 忽孫 グルーベ本は力 (阿波本・靜嘉堂本は「忽速」) であるから、この一節は碑面漢文によれば「同心シ協力スベシ」に相當する。トルコ語では力を *küç* 蒙古語では *küçün* といえは「忽孫」はこれと同語源である。なお「□失別」は、『金史國語解』に「以力助人曰阿息保」といえは、これと似た語かも知れない。
- ⑤ 吉撒 この語は「若シ……ナレバ」の意である。
- ⑥ この第三行目のいみは、漢文によれば「復會於此、當酌 (酒を注いで祝る) 而名之、後以是名 [賜] 其地云」に相當するであらう。

## [VII]

- ① 多羅幹 これはトルコ語 *törü* 蒙古語 *türü* 滿洲語 *doro* とも同義語である。
- ② 兀稱因厄禿別 「兀稱因」は「甲」の意で (グルーベ本)、滿洲語 *uksin* にあたる。「厄禿別」の「厄禿」は穿つの語

根である。したがって「兀稱因厄禿別」は甲ヲ穿チテ、あるいは甲ヲ穿チテ後の意となる。

- ③ 那卜連昧 これは滿洲語 *namatanbi* に對應するものであろう。これに相當する蒙古語は *činarhamoi* にしてカヴアレフスキーの『蒙古語辭典』によれば、辛抱強クアル、頑張ルの意もある。

- ④ 嫩木杜兒 グルーベ本によれば、青を「嫩江」という。「江」は名詞あるいは形容詞の接尾語——主として色に關する——である。滿洲語で青を *niowanġiyān* といへば、女眞語「嫩江」はこれに相當する。*niowanġiyān* は同時に干支の甲をも示すから、女眞語でもかく解してよいであらう。「木杜兒」は龍とあるから、干支の辰にあたり、滿洲語でも辰を *muduri* という。

- ⑤ この行のいみは、漢文によれば「戰士光浮萬里之移、勝敵刻日、其兆復見焉」である。

#### XIV

- ① 莽葛 この語は難の意で、滿洲語 *mānga* に同じ。

- ② この語は滿洲語 *jobombi* 「慮ル」にあたる。

#### XV

- ① この語はおそらく滿洲語 *eyerjēmbi* 「鮮明ニスル、昭ニスル、照ラス」と同義語と考える。「魯」は動詞不定法を示す語尾であるから「?者魯非稱者」は碑面漢文の「光昭」に應ずるであらう。

- ② 兀魯塞別 滿洲語 *urhušēmbi* 傾ク、垂レルの意から推して傾ケル、盡クスの意に解したい。

- ③ 一車吉 グルーベ本に新を「一車吉」という。吉は形容詞または副詞の語尾である。

#### XVI

- ① この四字づつ二句のいみは明らかでないが、碑面の漢文をうけて「穆穆タル」と譯しておく。

## XVII

① この語は碑面の漢文と照應すると、「忘レル」の意を有する語であろう。満洲語では *ongonbi* 「忘レル」である。

② この行のいみは漢文によれば「而揚偉績者、蓋有加而無己也」である。

③ この語の一字目は不明であるが、漢文に照すと明年にあたる。來年は「的溫阿捏」（來る年）である。

## XVIII

① 背塞 グルーベ本によれば官、官人を「背勒」という。これは満洲語の貝勒にはかならない。この貝勒の複數形と思

われるものに貝子 *beise* がある。この「貝勒」より「貝子」への轉化關係は不明であるが、貝子 *beise* は貝勒 *beile + se* (複數尾) の一が *assimilate* したものではあるまいか。したがって女眞語「背塞」もしくは解されないであろうか。ちなみに *beile* の語源は不明であるが、*Pelliot* や *Müller* のいうようにトルコないし西方に起源を求むべきであろう。

② ここでは塞の一字しか判讀しえないが、碑面漢文と對比して満洲語 *hebašembī* 商議スルに相當する語と推測する。

③ この三字はおそらく玄宗の音譯であろう。

④ 革捏別 革捏は去ル、往クの語根であるから、この語を「幸シテ」の意に譯した。

⑤ この五字は最後の孩が動詞過去形を示す語尾であることから推して、起義の直譯である「義ヲ起シタ」の意を示すものと考えたい。

## XXI

① 可 撰者趙可の可を寫したものの。

② 恩忒黑 グルーベ本には罰とあるも、ここでは罪と譯したい。満洲語 *endebugu* 咎・過、蒙古語 *endegurei* と同語源であろう。漢文をうけて「罪ヲ翰林ニ待ツ」の意であろう。

③ 赤巴勒 滿洲語 *ocihe* 雖然・然則、あるいは *oci* 若是・則より推して、この語を然レバ則チの意に譯した。

④ 塞魯 滿洲語 *sele* 説是・説より推測して……ナリトの意に解したい。

⑤ 忒魯忒 グルーベ本に進貢スルを「忘忘卜麻」とあることから推して、進メルの意に解した。

## XXII

① 希彈 この二字は契丹を寫したもので、契丹は正しくは突厥碑文にも頻出するように *xyra* と音すべきであるが、ここに「希彈」と寫されているのは漢字からの音譯であらう。

② 幹失昧 この語は陞ルの意であるが、本文ではつぎの語との關聯上、ノヅミと譯した。

③ XVII 行と對比して祐・福あるいは喜<sup>さいわい</sup>びの意とした。

④ 兀者必登 終綴の登はおそらく副詞尾で、この語の動詞不定法は「兀者必昧」である。

⑤ 哈答?? グルーベ本に哈答溫||誠、哈答孩||信とある。前者の語尾「溫」は形容詞を示す接尾語、また後者の語尾

XXIII

「孩」は動詞の過去を示すものなれば、これらの語幹「哈答」は「誠・信」の義を有することを知る。また次行第四段目と比較して、この三字を「信ニ・實ニ」の意に解したい。

## XXIII

① この三字は安馬『女眞文金石志稿』第五「大金慶源碑」の注解によれば、謀克の複數形であるから諸謀克と譯した。

② 第一行目のいみ不明の部分は、漢文によれば「諸道之兵、亦集其下、大巡六師、告以禍福」という。

## XXIV

① 撤必 この語は滿洲語 *seti* 祥・瑞・兆に當る。

## XXV

- ① 罕安 これはトルコ語・蒙古語 qayan 可汗に同じ。阿波本には哈安とある。
- ② 失 阿波本に亦立失亦立||起來スル時ニ起來セヨとあるより類推して「禿魯哈兒失」を視タルニ、視タル時と譯しておく。

- ③ 塞麻 この語は滿洲語 seme の意を有するものか。

- ④ [X] 行の註①を参照。

- ⑤ 神は [XVI] 行①と比較すると二字目が異なるが、碑面漢文と對照して神と譯しておく。

- ⑥ 牙ト魯は待ツであるが應ズルとして順イ應ズルの意とした。

## XXVI

- ① この段は安馬氏の譯を参照した。

- ② 第 [XII] 行参照。

- ③ 洪 動詞の過去を示す接尾語である。

- ④ 第 [XV] 行①参照。

## XXVII

- ① 撒? グルーベ本には撒希||知とあるも、その不定法は阿波本・靜嘉堂本に撒必とあるのが正しい。滿洲語でも知るは sambi である。

① XXIX

この一段は碑面の「化被朔南」に對應さすべきである。

XXXI

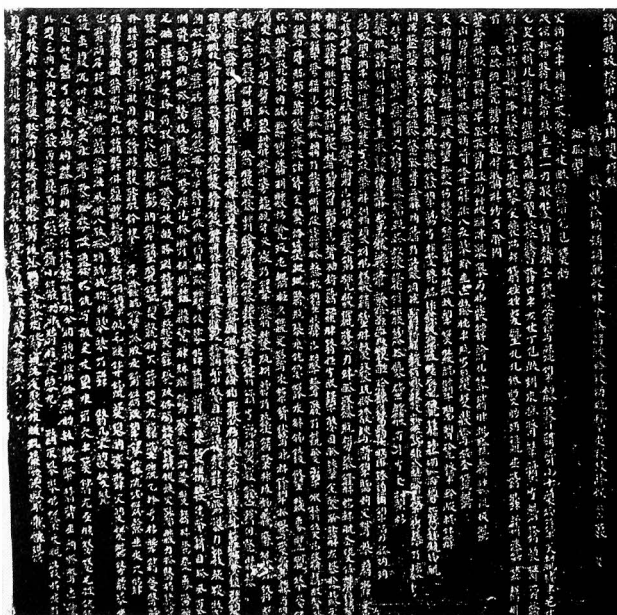
① この三字はおそらく詔であろう。滿洲語で詔を *selgiyere hese* といえ、これらと同系統のものであろう。

終りに本備考では印刷の都合上、女眞文字をもって説明しがたいので對譯漢字をもって表わしたため、讀者の理解を困難ならしめた點があつたことと思うが、やむない事情を諒としていただきたい。

圖版一 道宗皇帝契丹文哀冊拓

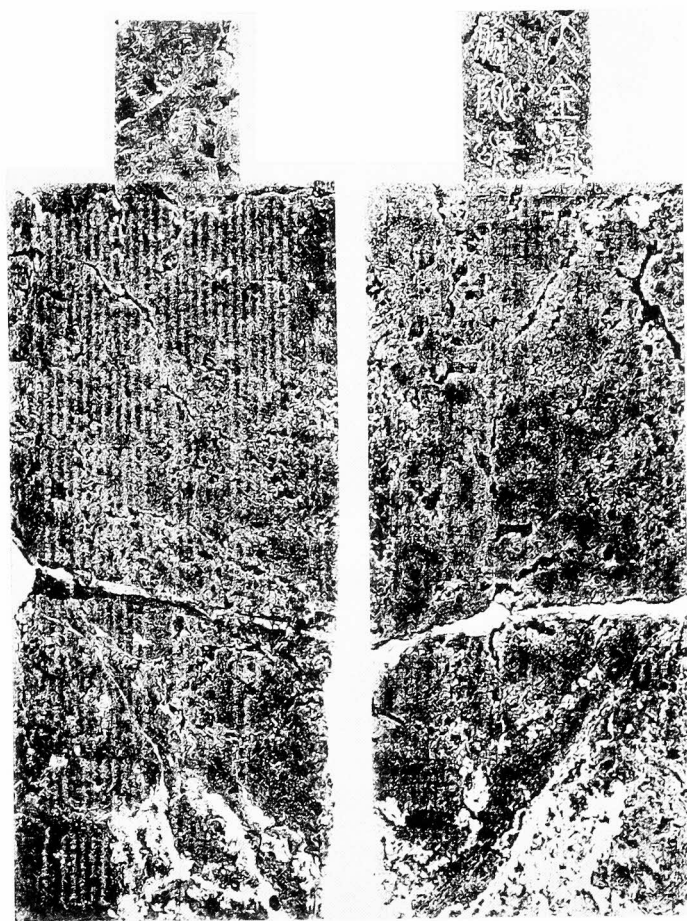


(篆蓋)



(碑身)

圖版二 大金得勝陀頌碑拓



碑 陰 (女真文)

碑 面 (漢 文)



## An Investigation of the Khitan 契丹 and Jurchen 女真 Writing Systems

*Jitsuzō Tamura*

Until just half a century ago, while it was known from the *Liao shih* 遼史 and other writings that the Khitan script had large and small case lettering, it was still unclear what the forms of their written letters had been—they were referred to as “the mysterious script.” However, in 1932 the imperial tombstone eulogies in the Khitan language from Ch'ing-ling 慶陵 were excavated and after a certain amount of difficulty their validity was confirmed. Since then a great deal of effort by historians and linguists of various countries with Japan and China leading the way has been devoted to deciphering the written language of the Khitan, but as yet no one has been successful at breaking the code. The Jurchen script also has large and small case lettering; “it was created by copying the pattern of the Khitan script,” as it says in the *Chin shih* 金史. Thus the Khitan and Jurchen writing systems have a kind of sibling relationship. Fortunately, for the Jurchen script we have the many tomb inscriptions starting with the “Monument in Honor of the Great Khitan Tesheng-t'o 得勝陀,” and the “Monument Engraved with the Names of Jurchen *chin-shih* 進士.” Furthermore, under the category of documents, we have the *Ju-chen kuan-i-yü* 女真館譯語. These materials are extremely rich. And with them the deciphering of the Jurchen script has advanced far beyond that of the Khitan script, but even the Jurchen script has not been fully decoded. The author feels that thusfar we understand all of the Jurchen material in small case lettering, while the large case material is not thoroughly understood.

Having reviewed the present state of research on the Khitan and Jurchen writing systems, the author hopes to make a modest attempt at decipherment by considering the forms, tone values and structure of both writing systems.